

JIA関東甲信越支部 保存問題委員会

国立劇場 半澤重信氏と巡る見学会

2023年10月25日

1. 見学会の概要
2. 半澤重信氏 略歴
3. 見学会の写真
4. 見学会資料（半澤重信氏 編集）
5. 国立劇場本館の建築評価（概要版） （東工大名誉教授 藤岡洋輔）

記録編集 福田之一

1. 見学会の概要

本年10月末で閉館となる国立劇場において、建設当時に文化庁技官として国立劇場の計画に携われた半澤重信氏に、設計に込められた思いや苦労話をうかがいます。

日時 : 2023.10.25 (水) 16:00~18:00

集合場所 : 国立劇場裏手の事務所入口 (楽屋口のとなり)

参加者 : 保存問題委員会メンバー (レクチャーからは半澤重信氏関係者も参加)
太田安則、福田之一、大嶽陽徳、大西康文、井口哲一、古賀大、安達文宏
半澤先生関係者
武田有左、市丸貴裕、石津幸子、(福田之一)

内容 : 16:00~16:30 第7回保存問題委員会
16:30~17:00 半澤重信氏からレクチャー
17:00~18:00 劇場内見学
(18:00~20:00 懇親会 ※)
※隣接するホテルグランドアーク半蔵門 和食処<門>にて

注意事項 : 現在国立劇場は再整備事業の事業者選定手続中のため、公平性を保つため建築関係者との接触を避ける等を徹底しています。ですので、今回の見学会は建築家の集まりではなく、「半澤先生の弟子たちが先生の説明を聞きながら劇場を見学する会」との名目で行われますことを認識の上、ご参加願います。

2. 半澤重信氏 略歴

- ・ 1930年東京生まれ。
- ・ 東京工業大学講師、千葉工業大学講師、文化庁文化財保護部主任文化財調査官など歴任。
- ・ 文化財の保存、博物館・美術館・資料館の建設計画に保存科学、環境工学の導入を主張し、全国にその設計・指導を行っている。
- ・ 作品に東京国立近代美術館工芸館その他がある。
- ・ 関与した施設数は文化財保護施設約800件、歴史民俗資料館約500件、博物館・美術館約200件弱に及ぶ。（中国国立陝西省歴史博、兵馬俑復元・展示など含む）
- ・ 主な著作に、「博物館建築—博物館・美術館・資料館の空間計画」（鹿島出版会）、「歴史民俗資料館」（井上書院）、「ミュージアムガラスの開発と期待」（Glass&Architecture(英・独)）、「文化財の防災計画」（朝倉書店）、「文化財を護る」（日本ファイリング）、他多数。

3. 見学会の写真



皇居に面する前庭・車寄



車寄・玄関前ポーチ



大劇場



花道の鳥屋の揚幕



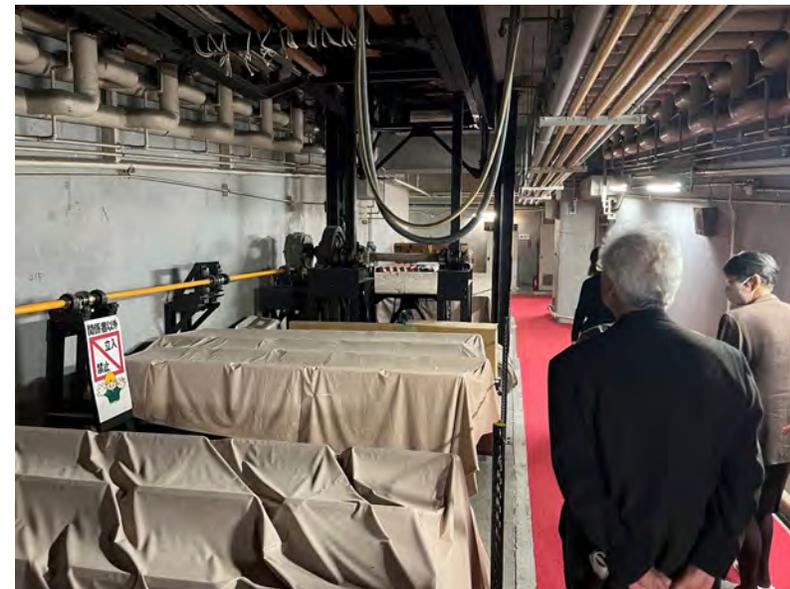
校倉風外装の端部



舞台下手



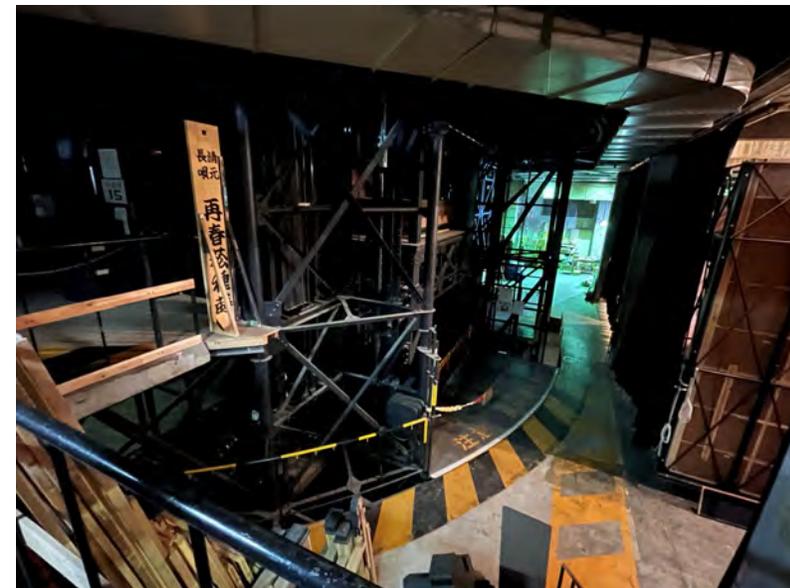
奈落 回り舞台機構



花道下、スッポン昇降部



奈落 小道具置場



奈落 回り舞台下部の小迫乗込み位置



花道は舞台間口の7:3の位置にあるべきだが



花道を使わない場合の客席数を増やすため位置変更



舞台上で半澤先生と共に記念写真

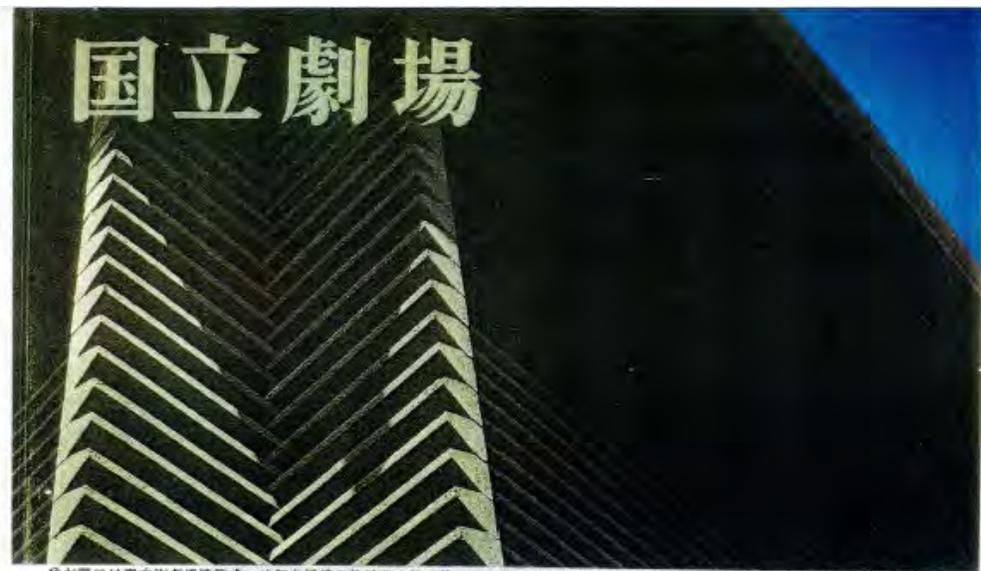


舞台に上がって記念写真



平櫛田中作〈六代目菊五郎鏡獅子〉の前で記念写真

4. 見学会資料 (半澤重信氏 編集)



国立劇場

我が国には現在迄劇場建築或いは舞台機構の設計その他に就いて一般に公刊された記述書は殆ど皆無である。明治初年、西欧先進諸国を視察した岩倉具視ら新政府要人は帰朝する中緊急に国立劇場を設立すべしと国会に建議した。爾来70年、漸く国力も整い、昭和41年3月31日、日本の伝統芸術の爲の国立劇場が完成して、同年11月1日開演した。此の事を記念して劇場はその詳細な内容を広く江津に知らしめ、且つ此の建物の建築の投資とすべく、和文・英文の書を上梓した。我が国における国立劇場の嚆矢たるその基本構想に国立劇場設立準備協議会委員長として当初から携わった高橋誠一郎、理事長寺中作雄、事業部長森吾六、そして基本構想の図面化並びに設計・監修を主導した半澤重信が技術的諸元・諸量を記述した。【設計：半澤、写真：三輪良久 発行：国立劇場】



「国立劇場建築設計」は、この「見学会資料」の副題である。この「見学会資料」は、国立劇場の建築設計の歴史を、高橋誠一郎、寺中作雄、森吾六、半澤重信の4人の関係者から、その経緯、設計の過程、建築の完成、開演の経緯、そして現在の国立劇場の現状について、詳しく紹介している。この「見学会資料」は、国立劇場の建築設計の歴史を、高橋誠一郎、寺中作雄、森吾六、半澤重信の4人の関係者から、その経緯、設計の過程、建築の完成、開演の経緯、そして現在の国立劇場の現状について、詳しく紹介している。

これ一冊で国立劇場のツウ

この一冊は、国立劇場の建築設計の歴史を、高橋誠一郎、寺中作雄、森吾六、半澤重信の4人の関係者から、その経緯、設計の過程、建築の完成、開演の経緯、そして現在の国立劇場の現状について、詳しく紹介している。

覆継口澄清—猗致叢藜 二

国立劇場

皇居文化財建造物

東京国立近代美術館工芸館

皇居新官殿

舞樂臺

昭和天皇皇嗣明仁仁成祚 壹町在 披露夜餐會

設計監修 半澤重信





劇場敷地視界一杯に兎草や花の草原が並び、路傍の桜がこの地の景を一層美しくしていた。右側の柵は米軍から此の地が返還されて建設省が敷設。正面林檎の並木が米軍宿舎の様相を残している。
昭和34年（1959年）4月7日 筆者写

春になると敷地の東側田圃沿いに沢山の桜が、一斉に花を開く。都心にこのような広い場所があったのかとびっくりさせられるこの地にはクローバーとタンポポ手が、真っ白と濃い黄の色を織り交ぜて咲き誇る。まさに厚い絨毯を敷き詰めたようである。其処に皇居のお堀や国会議事堂が遥か遠くに背景となり、如何にも「将来の国立劇場」の背景に相応しい、広大な美しい空間を創り出しているのがあった。昭和30年代（1950～1960年）半ば、未だ交通量の少なかったこの敷地の前面、電車通りには車を止めて花を楽しむ人も多かった。面積は9000坪余り（30000㎡余）が決められた。

劇場敷地測量の原点を何処にするか建設省係官から指示を求められた私は、敷地北東隅にあった「警視總監公邸守衛所の敷地・西南端の一点と、南方面か三宅坂を超えて国会図書館の南にある伊藤博文の銅像の礎石、その東北端一点を引き通し」て水準点を定めた。

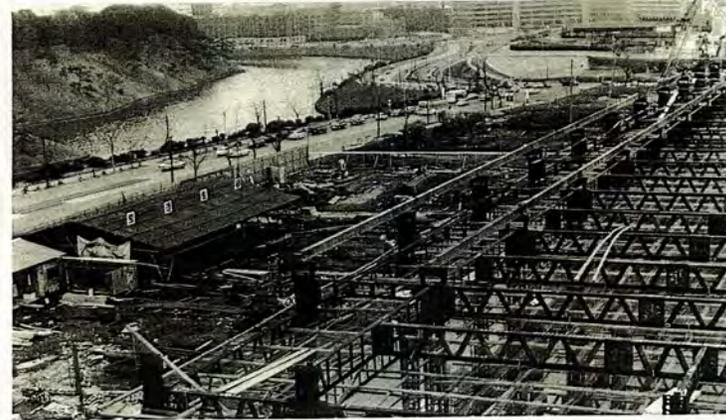
昭和39年（1964年）8月8日、文部大臣・愛知揆一、文化財保護委員会委員長・河原春作、関係者 300余名の列席の下に国立劇場建設の起工式が行われた。米軍の施設は完全に撤去され、敷地内西側付近の警察庁住居施設も敷地北側に代替施設を新築（基本設計：筆者）して取り払い、一方建設中の此の地の地下を通る首都高速道路3号・4号線の工事仮設建物全てもその前日迄かかって移動を終わったのであった。 筆者：国立劇場・昭和44.7.1 国立劇場刊



第2次世界大戦後進駐したD. マッカーサー司令官も美しさに驚嘆し激賞下と云う三宅坂前の桜田溪を、埋め立て高速道路に変える計画を知った文化財保護委員会は、驚き急遽劇場用地東側部分を提供して辛うじて此の景観を確保、取り敢えず仮柵を立てた。写真には皇太子御成婚パレード平行演習中の皇宮警察騎馬隊と都電が走っているのが見える。（撮影：昭和33年12月）



写真3（左上・右）



文化財保護委員会は特別史跡江戸城の保全の為に、オリンピック道路建設の緊急性から止むを得ず、急遽国立劇場用地内桜田溪対岸の国道・内堀通り沿いに、約80メートルの空地を取り、その地下に高速道路を通す事に同意した。但し当然此の措置は後日国立劇場の平面計画に甚大な制限＝影響を及ぼす事になる写真4



写真5

っている。他方、各役者・舞台関係者に、何とんでも自分の代に我が本物を次世代に伝え、遺したい、そのための舞台機構はどうあるべきかを考えることが緊急に必要である。という意識も非常に強くなってきた。それらが共通して大きな理由になったということができよう。「安全第一」、「利便第一」とする筆者の主張の具体的な促進を望んだ大木は、「日本の伝統芸能を、中でも歌舞伎の本果の姿を駄目にするものだ」という頑強な老名優等の説をしばらく置き、筆者の考え方を自らの意見として若手役者に説いてとりあえず了解させた。そこで筆者は遂に後に記す通りの舞台機構の実現に踏み切ったのである。設計の基本計画当初から強硬な反対者であった老優達も、生涯の舞台の中で結局ここに完成した新しい機構を使用したようである。ともあれ古典劇場の我が国の職矢となったこの劇場の中核に新劇の畑から入った大木は、「これからの時代に伝統芸能を生かし続けて行くには、時代に即応できる斬新さを受け入れる考え方がまず必要だ」と論じて、筆者の論とこれも終局的には同調した。恐らく今日ある国立劇場の舞台機構の根本思想は、その大木の考え方がそのまま伝わっていることと思われる。先の「会」では、劇場の現技術スタッフの、大木に対するさまざまな想い出、感謝の銚先が今度は筆者に向けられて、筆者は驚いた。かつ感激した。件の舞台機構は運転開始以來すでに40年にもなろうとしている。設置した当初の頃は極めて不評であると聞いていたからであった。今、創設以来そのままの姿の舞台機構が筆者の当時の考え方・利便性と安全性が喜ばれ、なお評価されていることを初めて知ったのである。確かに当初すべての演技者・技術者から常識外れであると批判された機構の全駆動方式を取って電動とし、大迫り、中迫りの周りを

を有孔鉄板で囲み、あたかも巨大な輪を造ってその中に上下させることにしたことなどは、(図2、3) 演者あるいはオペレータその他どのような立場の者にも甚だしい戸惑いと、何物とも比較できない不安感、そして恐怖感までも与えたに違いない。実は劇場が開場して以來しばらくの間、非常に気掛かりのままになっていたのである。そのため一層、今回の現役スタッフ各位の舞台を懐く心の強さに改めて敬意を表し、感謝した。

国立劇場の具現化が決まって昭和31年(1956)秋、文化財保護委員会に招かれて参加することになった筆者は、当時劇場について、営利を抜きにしては存在し得ない商業劇場しか知らなかった。そして「営利と無関係な劇場が果たして存在するのか」「国立劇場は国営であるという理由からそれを無視して成り立たせてよいものだろうか」といった疑問を持った。その疑問はこれから具体化すべき建築計画にまで敷衍して「時代と共に生きて行くはずの伝統的な演劇の“本物”とはいかなるものをいうのか」から「それはどう運営されるべきか」「どのような空間に、どういった形で後々の世代に伝えて行くべきか」といった問いになり、舞台機構についても設計の基本計画から施工、据え付けが終わった後まで重く心にのしかかってきた。一方、その舞台機構がよしんばどんな形で完成するにせよ、恐らく10年後にはもうすでにオペレータの補充が難しくなっているのではないかと、極めて不安になっていた。

各地に伝統を誇った農村歌舞伎の舞台が、特に第二次世界大戦後廃絶の憂き目に遭っている。最大の原因は経済とか人手不足といった理由以前に、人々の考え方自体が変わったことになって、価値ある先人の遺した地域の文

化が失われるという、由々しい問題を惹き起こしているのである。この事実に加え、筆者の胸中には終戦直後の、たまたま東京築地の或る劇場で回り舞台が人の手当てがつかぬため放置されたままになっている光景を強烈に記憶に残してきたからでもあった。偶々、フトしたことから知ったこの劇場技術者が中学校5年生かであった筆者をガランとして荒れ果てた奈落に案内して、木造の回り舞台の中に入り人力による駆動の仕方などを説明しながら、「これからは科学万能の時代にはなるだろう。けれども、もしこの小屋が再開しても舞台は電動にすべきではない。益とかすっぽんは人が直接動かさなければ、芝居の本当の姿が観客に伝わらないのです」という。「一つ一つの場で本物を見せられないと、芝居・歌舞伎そのものまでが亡くなってしまふ」彼は拭えずにいる怖れから、そう呟いていたのであった。

それから10年後、幸いにも筆者は明治の初年以來歴代政府の悲願であった国立劇場設立が具体化する、ちょうどその時に出会った。しかもその建設事業全体を監修すると同時に、自ら舞台機構等の設計・監理に直接携わることになった。そこで改めて無人のあの荒廃しきった劇場の奈落と、耳にした老舞台技術者の言葉が鮮明に蘇ってきた。伝統を守りつつもなお自らのオリジナリティを表現しようと懸命に演じてきた名優達がさらに求めることになろう、演技しやすい舞台、それにさらに丁夫を加え、時流に左右されない永く生き続けられる舞台を実現させたいと心に決したのである。折しも我が国の高度経済政策が軌道に乗って、各地にさまざまな文化施設の建設が隆盛の兆しをみせはじめつつある。そこでなおそれらの頂点に立つ国立の劇場として、伝統とその将来のあり方に対する思想をしっかりと持たねばならぬ、



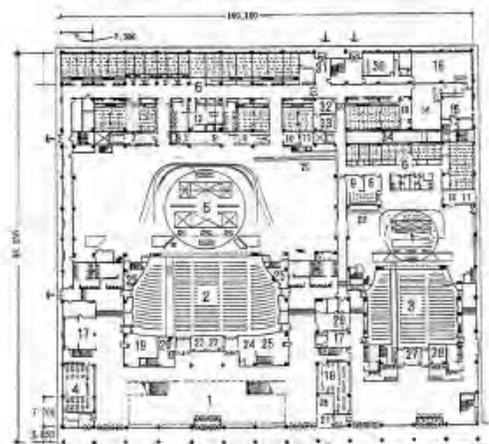
国立劇場用地が確定したのを祝うかのように、折から皇太子と正田美智子さん御成婚パレードの予行演習が敷地の正面道路で行われていた。(昭和33年(1958)2月、筆者写)

という気負いがあった。たまたま劇場業務の合間に行なったニューヨークでの日本館の設計が終わって帰国し、日本文化の深さと素晴らしいを改めて痛感したことが一層その気負いを加速させ、覚悟を強固にさせたのである。また、このことが我々に遺されてきた文化財をいかなる方法で護って行くか、文化財の本果的な価値をいかに損なわずに今後永く生かすか、その具体的な方策——当時日本の建築界においてほとんど未踏の域であった——を、建築計画の分野から追求しようと筆者の今に繋がる直接の動機になったのであった。その意味で国立劇場の舞台機構の設計は、筆者にとってまさに天与の贈り物であった。後々の文化財の保存の一つのあり方を示す軌範的な例にしよう、とりも直さず我が国の文化財保護行政にとっても非常に重要な意義を持つはずであると思われた。一事実現かにそれはそのための試金石になった



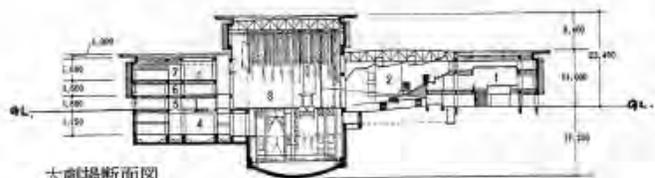
配置図 (昭和41年11月竣工時現在)

平面図 (昭和41年11月竣工時現在)



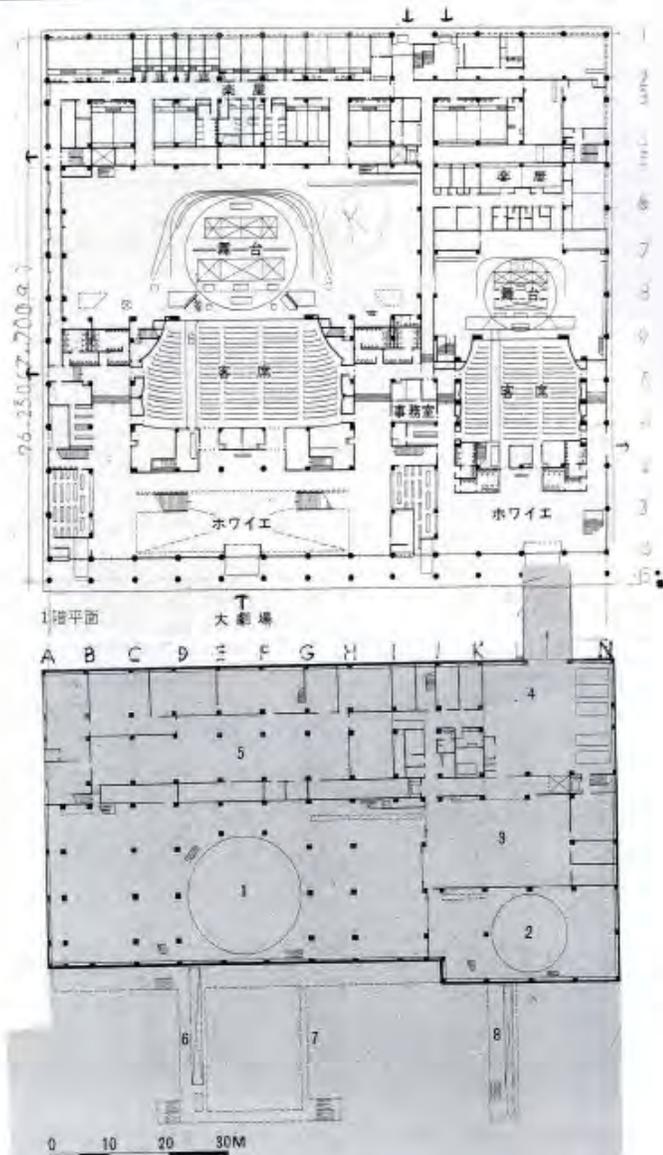
- 1階
- | | |
|-------------|--------------------|
| 1 玄関ロビー | 18 ロッカー |
| 2 大劇場客席 | 19 音響効果室 |
| 3 小劇場客席 | 20 換気室 |
| 4 クロークー喫茶室 | 21 入場券売場 |
| 5 舞台 | 22 技師室 |
| 6 楽屋 | 23 映写室 |
| 7 小道具室 | 24 監事室 |
| 8 床山 | 25 照明操作室 |
| 9 衣装室 | 26 事務室 |
| 10 楽鈴・舞台効果室 | 27 TVカメラ中継室 |
| 11 小製室 | 28 管音室 |
| 12 浴室 | 29 炊事室 |
| 13 化粧室 | 30 受付・守箱・用務員控室 |
| 14 楽屋食堂 | 31 来居人口・下足預・大劇場事務室 |
| 15 厨房 | 32 応接室 |
| 16 職員食堂 | 33 小劇場事務室 |
| 17 売店 | 34 光室 |

1階



大劇場断面図

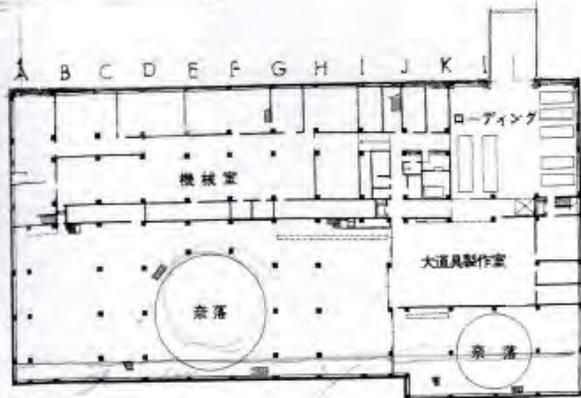
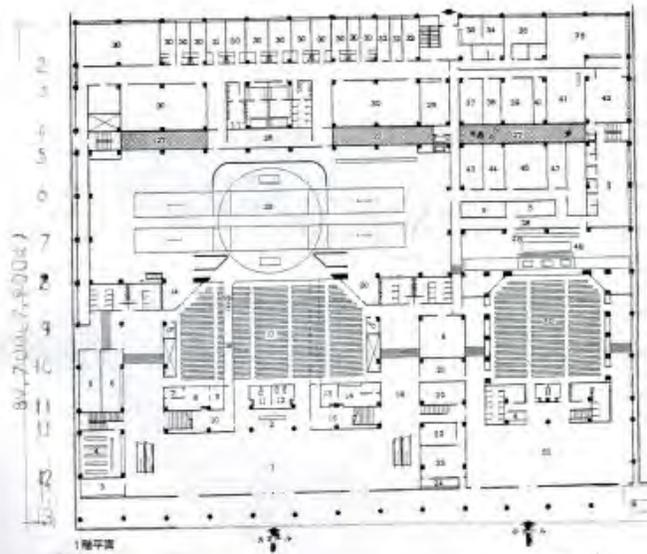
- | |
|----------|
| 1 ラウンジ |
| 2 客席 |
| 3 舞台 |
| 4 空調機機械室 |
| 5 楽屋 |
| 6 事務室 |
| 7 図書閲覧室 |



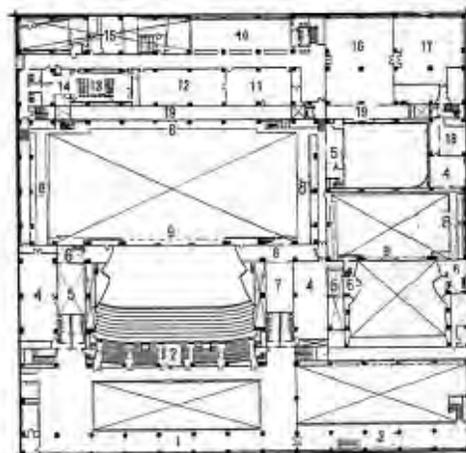
2階平面 大劇場

0 10 20 30M

平面図 (昭和41年11月竣工時現在)

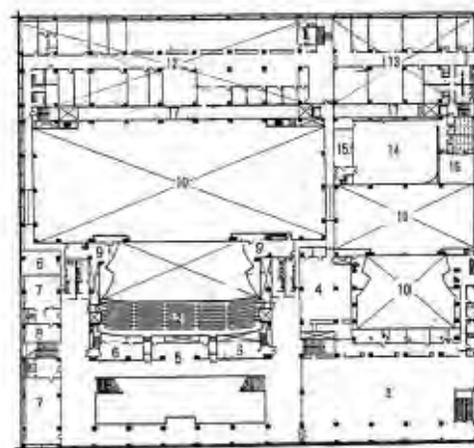


地階平面



3階

- 3 階
- 1 ラウンジ
- 2 大劇場客席
- 3 食堂
- 4 空調調整機械室
- 5 タクト
- 6 調光機械室
- 7 主配電盤・大劇場変電機室
- 8 キヤットワーク
- 9 フライングブリッジ
- 10 事務室
- 11 図書閲覧室
- 12 書庫
- 13 試写室
- 14 映写室
- 15 録音・視聴・音響調整関係室
- 16 資料展示室
- 17 資料収蔵庫
- 18 資料修理室
- 19 光庭



2階

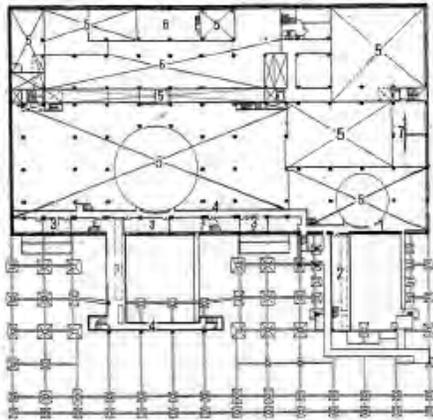
- 2 階
- 1 ラウンジ
- 2 大劇場客席
- 3 大食堂
- 4 厨房
- 5 売店
- 6 倉庫
- 7 特別室
- 8 控室
- 9 投光・調光関係室
- 10 吹抜
- 12 管理関係部門事務室
- 13 養成関係部門室
- 14 総稽古・録音室
- 15 録音録音関係機器室
- 16 立稽古・本練室
- 17 光庭



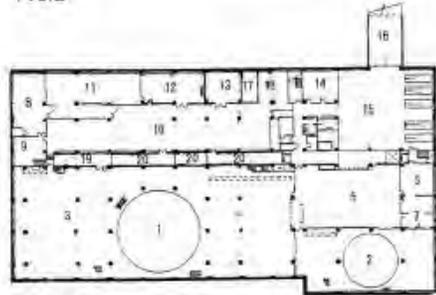
小劇場断面図

- 1 ラウンジ
- 2 客席
- 3 舞台
- 4 総稽古室
- 5 大道具製作室
- 6 楽屋
- 7 事務室
- 8 資料展示室

平面図（昭和41年11月竣工時現在）



中地階



地階

中地階

- 1 大劇場鳥居連絡通路・上部花道
- 2 小劇場鳥居連絡通路・上部花道
- 3 倉庫
- 4 通路
- 5 吹抜
- 6 箱直室・控室
- 7 舞台機構制御盤室

地階

- 1 大ホール幕落
- 2 小ホール幕落
- 3 大道具倉庫
- 4 大道具製作場
- 5 検査場
- 6 大道具事務・控室
- 7 舞台機構係室
- 8 特高室
- 9 電池室
- 10 機械室
- 11 電気室
- 12 監視室
- 13 発電機室
- 14 運転手控・仮眠室
- 15 ローディング
- 16 斜路
- 17 受水槽
- 18 テンブコーナー
- 19 舞台機構制御盤室
- 20 ファン室

建築概要

建設位置：東京都千代田区幸町4番地（旧13番地）

敷地面積：30.047 ㎡

構造：鉄筋鉄骨コンクリート造、地上3階・地下2階建

規模：延面積・10,8047㎡、延面積・26,567㎡

軒高：一般部分 14.000m、最高部分 23.400m

客席数・大劇場 1,746、小劇場 630

工期：昭和39年8月8日～昭和41年10月31日

施工主：文部省

設計監修：文化財保護委員会

設計：基本設計：岩本博行外13名

実施設計：建設省・官繕局

工事監理：建設省・官繕局

施工：株式会社 竹中工務店

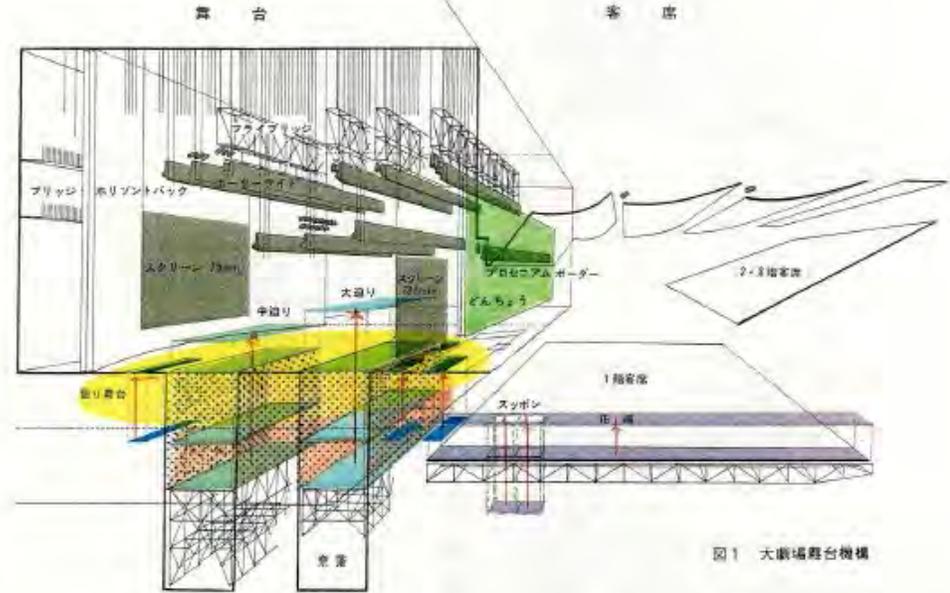


図1 大劇場舞台機構

表1 大劇場 迫り・花道・すっぱん等の設計諸元

名称	速度	停止場所	行程	必要時間	寸法	荷重	備考
大迫り	No.1	高速 12m/min 低速 8m/min	SFL+3.622m SFL+任意点 SFL	巻速 27秒 巻上 27秒 巻下 26秒	3.98m×7.8m	4.6kg	振揺起動 電磁クランプ拘束運動運転可 任意点でリットスイッチ移動設定
	No.2, No.3	高速 12m/min 低速 8m/min	SFL-4m SFL-6.75m SFL	巻上 30秒 巻下 30秒 巻上+1分16秒	3.94m×3.67m	2.15kg	振揺起動 電磁クランプ拘束運動運転可 任意点でリットスイッチ移動設定
中迫り	No.4, No.5 No.6, No.7	高速 12m/min 低速 8m/min	SFL+1.8m SFL+任意点 SFL	巻上 14秒 巻上 30秒 巻下 51秒	1.97m×3.78m	1.1kg	振揺起動 電磁クランプ拘束運動運転可 任意点でリットスイッチ移動設定
	No.8, No.9 No.10, No.11	高速 12m/min 低速 8m/min	SFL-4m SFL-6.75m	巻上 21秒 巻上 95秒	1.97m×2.72m	0.77kg	振揺起動 電磁クランプ拘束運動運転可 任意点でリットスイッチ移動設定
小迫り	No.12	高速 9m/min 低速 6m/min	中巻席 SFL-4m	巻速 28秒 巻速 40秒	1.21m×3.65m	0.89kg	
	No.13	高速 9m/min 低速 6m/min	中巻席 SFL-4m	巻速 28秒 巻速 40秒	1.21m×2.72m	0.5kg	
	No.14, No.15	巻速 9m/min 低速 6m/min	中巻席 SFL-4m	巻速 28秒 巻速 40秒	1.21m×1.82m	0.33kg	低速6m/minの巻速はベルト シープを二股としVベルトを掛 け換える。
	No.16	巻速 9m/min 低速 6m/min	中巻席 SFL-4m	巻速 28秒 巻速 40秒	1.21m×3.65m	0.86kg	
回り舞台内 びだ巻			回転角 90°	15秒	0.3m×3.65m		
下巻席 すっぱん	9m/min	中巻席 SFL-4m		26秒	1m×1m	0.15kg	
花道	3m/min	SFL SFL-1.25m		28秒	5.6m×17.75m	1kg	
花道 すっぱん(2台)	巻速 9m/min 低速 12m/min	SFL-2m SFL-4m(中巻席)		26秒	0.9m×0.9m	0.12kg	低速9m/minの巻速はVベルト を掛け換える。 電磁クランプ拘束運動運転可

出典：国立劇場（国立劇場事務局）

- 1 回転舞台
- 2 大迫り (3分制)
- 3 中迫り (8分制)
- 4 小迫り5基
- 5 ドブ迫り
- 6 下座前すっぽん
- 7 花道すっぽん (2分制)
- 8 ドブ蓋
- 9 大臣間い (定位置)
- 10 大臣間い (格納用り込み位置)
- 11 花道
- 12 仮花道位置
- 13 舞台機械操作室
- 14 縦横 (3本)
- 15 防火扉位置
- 16 フロントライト
- 17 花道フロントライト
- 18 スクリーン水平位置
- 19 大幕幕 (3分制) 位置

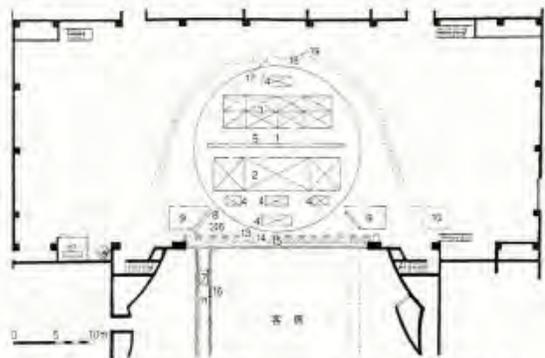


図2 大劇場舞台平面図 回転舞台、迫り、すっぽん関係 合計22基

- 29 中寄高島屋連絡通路
- 30 中寄高迫り乗り場
- 31 幕落

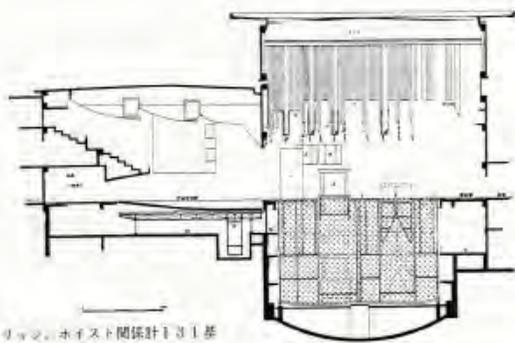


図3 大劇場舞台断面図

吊物、ボーダーライト、フリップ、ホイスト関係計131基



旧大劇場の回転舞台基礎下面が敷地前傾田畑の平均水面と略同じ位置となり、極の水位が上昇すると、その水圧で舞台が押し上げられる恐れのある事が判明。急遽舞台基礎の形状を橋脚に変更して数百トンの石を回転体基礎の下に重鎮として充填した。昭和39年(1964)11、12月号発行。(写真・図3)

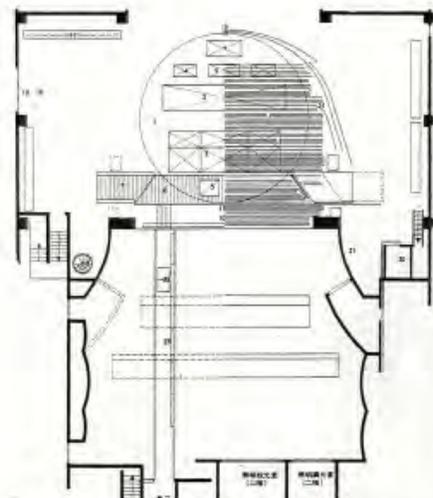


図4 小劇場舞台平面図・迫り類、吊物配置図

- 1 回転舞台
- 2 大迫り
- 3 中迫り (6分制)
- 4 小迫り 4基
- 5 文楽迫り 2基
- 6 舟 底
- 7 大臣間い
- 8 大臣間い吊り上げスペース
- 9 上手、下手フリップブリッジ 2基
- 10 防火扉
- 11 縦 横
- 12 虹 梁
- 13 吊り物バトン 18本
- 14 中水平
- 15 大水平
- 16 大幕幕 (3分制)
- 17 揚げ蓋・道具搬入バトン
- 18 スクリーン格納バトン
- 19 大小劇場連絡口
- 20 舞台機械操作室
- 21 文楽回し装置定位置
- 22 花道すっぽん
- 23 花 道

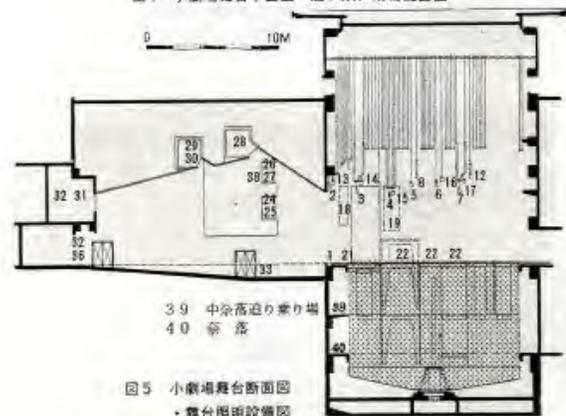
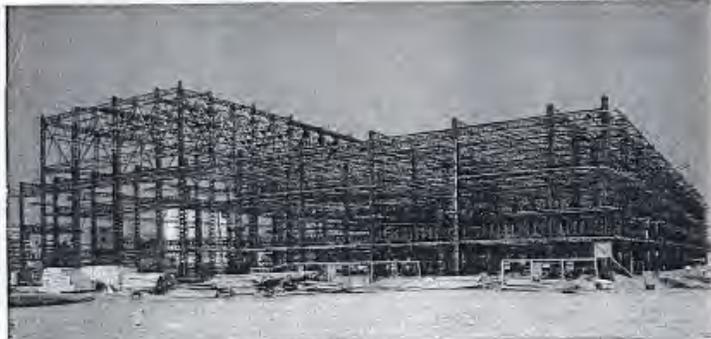


図5 小劇場舞台断面図
・舞台照明設備図

- 1 フットライト
- 2 プロセニウムボーダーライト
- 3 No.1ボーダーライト
- 4 No.2ボーダーライト
- 5 No.3ボーダーライト
- 6 No.4ボーダーライト
- 7 No.5ボーダーライト
- 8 No.1アッパー水平ライト
- 12 No.2アッパー水平ライト
- 13 プロセニウムフライダクト
- 14 No.1フライダクト
- 15 No.2フライダクト
- 16 No.3フライダクト
- 17 No.4フライダクト
- 18 トーメントライト
- 19 タワーライト
- 20 キャラクターコンセント
- 21 舞台前及び両サイドフロアコンセント
- 22 途中及び迫り中フロアコンセント
- 23 舞台奥フロアコンセント
- 24 No.1サイドフロントスポットライト
- 25 No.1サイドフロントアークスポットライト
- 26 No.2サイドフロントスポットライト
- 27 No.2サイドフロントアークスポットライト
- 28 No.1シーリングスポットライト
- 29 No.2シーリングスポットライト
- 30 No.2シーリングホロススポットライト
- 31 センタースポットライト
- 32 投影効果機
- 33 花道用フットライト
- 36 幕用スポットライト
- 38 仮花道用サイドスポットライト



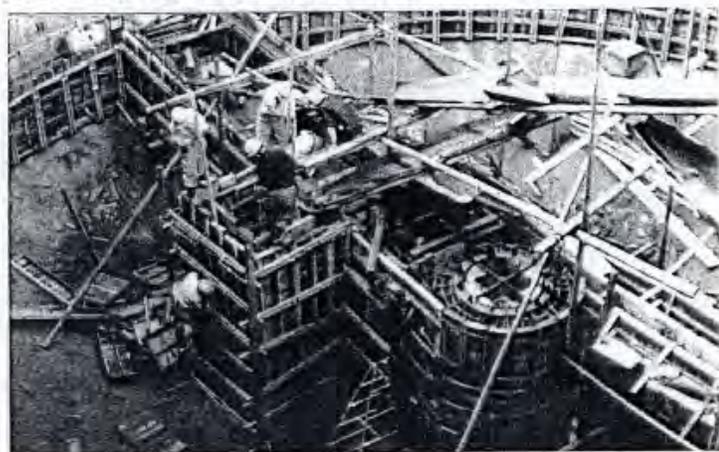
大劇場舞台・照明その他常設吊物設備、器具取り付け工事中。昭和40年(1965)1~2月。筆者写



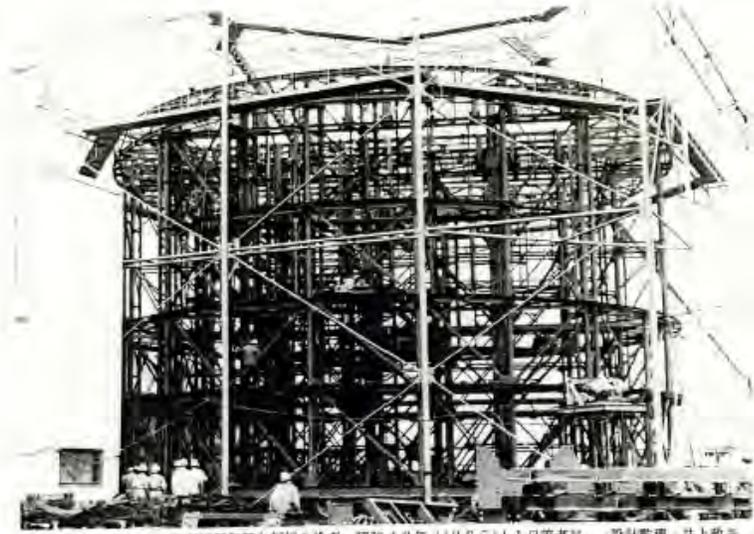
鉄骨建方完了を敷地南方より見る。昭和40年5月下旬



大劇場2階・3階席コンクリート仮枠及び配筋の施工中。昭和40年6月下旬



大劇場回り舞台基礎コンクリート打設工事。舞台機構が積載荷重も含め100T以上に及ぶ為、特に入念に人力によって施工した。昭和40年3~5月
(写真：上中下共筆者)



大劇場回転舞台仮組み検査。昭和40年(1965)11月筆者等。設計監理・井上政孝、筆者。工事監理・建設省。施工・三精輸送(株)。幹太院。

益・迫りの規模と駆動

昭和30年初頭からほとんど10年間に及んだ過去の実情を墨守すべしとする歌舞伎役者・関係者等の常識と、人々の先向きに不安を軸とする筆者の意見の相克は、大木の理解も得て熟考の末、意を決して舞台機構すべての駆動を電力によってスイッチ一つで作動することにして決着した。国立劇場設立準備協議会の各分科会で詳しく検討し決定したその舞台機構は、我が国に例を見ない大規模なものとなり、かつ多張を極める方式の迫りをそこに内蔵して、世界の劇場にも見られぬ特殊な機構となった。その大きさと厳密な仕様(表1、2)から、電力でなければその運転は到底不可能であったから、動力使用に強く難を示し続けてきた反対派もやむなく承認した。彼ら自身が演出・演技上、「大劇場の大迫りを間口8間(約14.5m)、奥行2間(約3.6m)以上の規模を確保し3分割可能なこと、中迫りは間口1.5間(約2.7~3.6m)、奥行1間(約1.8m)の迫り8基を同時に使用し得ること、さらに小迫り5基、ど

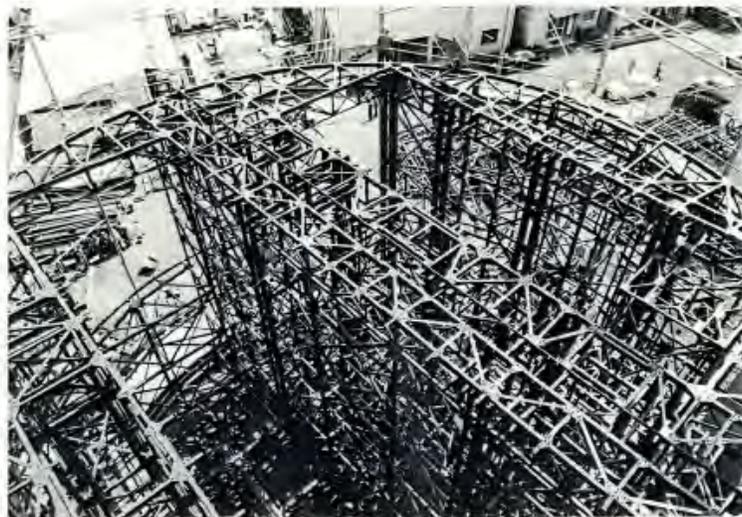
表2 回転舞台の設計規模

寸法(m)	大劇場		小劇場	
	直径	円周	直径	円周
回転速度(回転/分)	高速	1.2	1.2	
	中速	0.9	0.9	
	低速	0.6	0.6	
360°全回転所要時間	高速	1'16"	1'18"	
	中速	1'32"	1'59"	
	低速	2'20"	2'44"	
	微速	4'21"	6'06"	
積載許容重量(kg)	47,000	19,000		

出典：国立劇場(国立劇場事務所)

ぶ迫りを回り舞台内に設ける。迫りの床は奈落床面〔深さ3間半(約6.3m)〕から回転舞台上2間(約3.6m)の高さまで上下できること〕などを要求したのである(図1、2、3、写真1)。

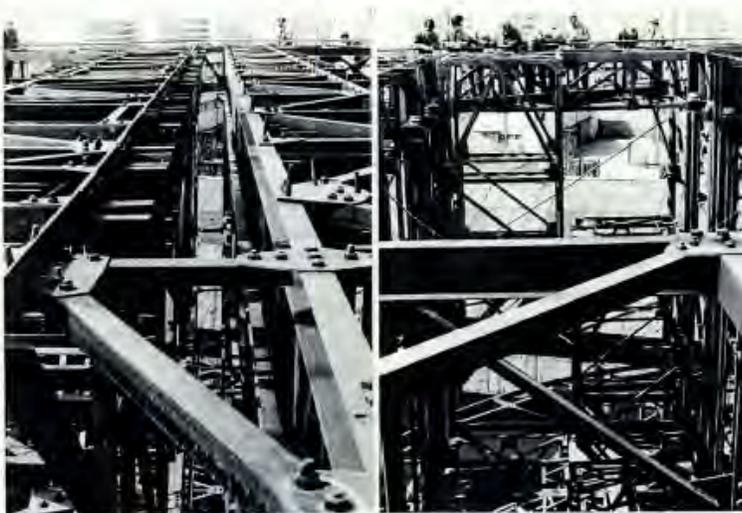
回り舞台の直径が約11間、20.00mに決まる。一方、迫りの構造上、回り舞台の躯体は奈落の深さの2.5倍程度の寸法が舞台面下に必要で、それはちょうど直径20m、5層建ての円形建物を舞台面下に埋め込むのと全く同じ規模になる。しかも、その建物自体が回転しつつ内に組み込まれた十数基の迫りを同時、あるいはそれぞれ別個に上下動をさせねばならない。それゆえこれらの構造体はすべて鉄骨造としたのであった。総高(駆動部高)13.6m・



回転舞台に組み込む大・中・ドア・迫りの納まり確認。ドアは舞台を中央で2分するので、その構造と納まりに、また舞台・迫りの作動中発生するであろう騒音に対して特に厳重な検討をおこなった。昭和40年(1965)12月暮、筆者写。

奈落床面より約7.6m。これで「楼門五三桐」南禅寺楼門のような二階建屋台等も奈落で組んで、迫り揚げる事が可能になった。一方、歌舞伎に不可欠な舞台たる「花道」も鉄骨造且つ可

動として、不要時には客席床下に下げて蓋をし、客用椅子をその上に据える。仮花道は国立劇場設立準備協議会の専門分科会で相当の論議の末、必要時に仮設することが決定されたのであった。



回転舞台を2分する「ドア」(写真左)、及び舞台回転時、迫り作動中の材構揺れ・蓋への音圧の厳密性の確認。(写真右一左から3人目が筆者)、昭和40年(1965)12月。

回転舞台の駆動

大劇場の回転舞台は鉄骨で円筒状に躯体を組み、大・中・小・ドア迫りを内蔵する。その躯体の底の縁周に24個の車輪を配し、円筒に駆動を伝える帯を設けて、モーターにより舞台(盆)を回転させる。[p.8図3、アミ部分]

小劇場の回転舞台は、漏斗を逆にした形の回転体の底の中心に回転軸を置いて、その上部・回転体、外周に硬木を取り付け、巻き付けたワイヤロープを操作して舞台(盆)を回す。この方式は日本の伝統的な農村歌舞伎舞台の定式として古くから行われてきたものである。[p.9、図5アミ部分]

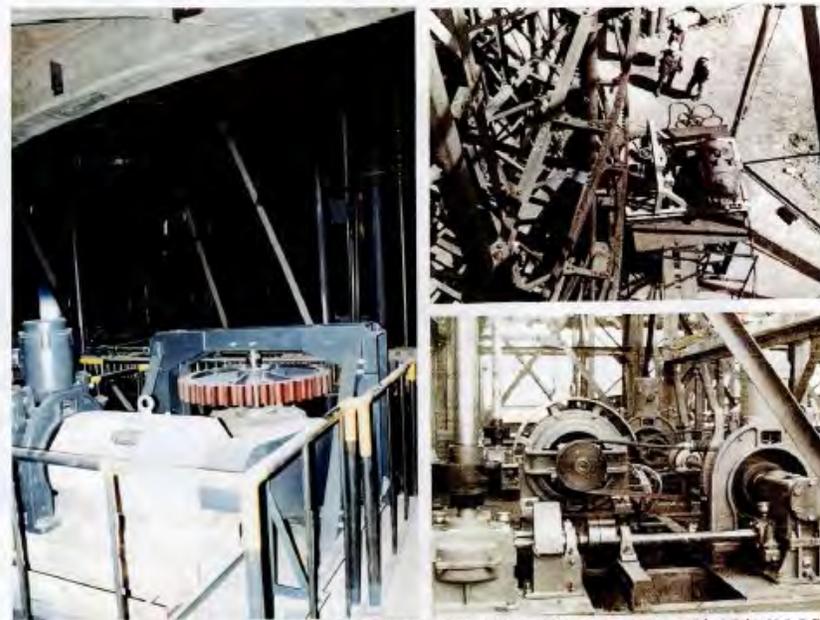
設計：後藤一雄(東京工業大学教授)、筆者



大劇場回転舞台の駆動輪(径500mm、24台)



「重要有形民俗文化財・高野の舞台」(高知県東津野村)の回転舞台駆動装置。昭和52年(1977)筆者写。



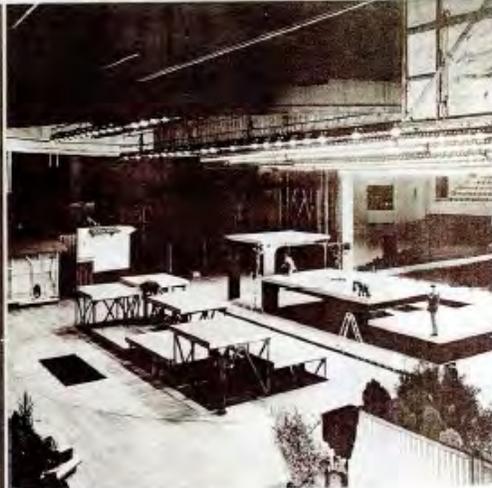
写真左：大劇場回転舞台の駆動機構。写真右：駆動モーター装置。昭和40年(1965)12月暮、筆者写。近年に小劇場回転舞台駆動機構もこの方式に変更された。



大劇場奈落床から上昇中の大迫りを見る。



奈落に降りた大迫り。演者の「安全」のため、大・中迫りの周囲を有孔鉄板で囲み、迫りはその中で上下させる。劇場が開場した当初の頃は、迫り上の演者から「周囲が見えず自分が何処にきているのかも判らぬ、不安だ。常識外れの設計だ。」と強く批判され、極めて不評であった。三輪晃久写



写真上：大劇場の回転舞台に組み込まれた大・中・小・ドブ迫り。左端の切欠は小迫りが舞台面下に降りた状態を示している。

写真左：大劇場中迫りに小道具を搬入中。三輪晃久写

奈落・舞台回り・迫り機構



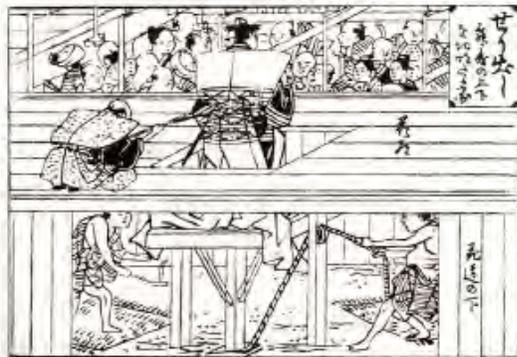
写真上：回転舞台（回り舞台）の作動中に演技者が奈落床から大セリ・小セリに乗り移る為の移動階段。舞台公演中は特に奈落空間全体が暗く、演者・舞台作業者は全ての動作に於いて極めて危険な状態に晒される。其の為、人の動作・機材・道具の安全を如何に得るか、を全ての設備の材質・構造の設計課題に帯えた。

写真下（左）：中央にセリを交える4本の鉄柱が見える。その中外側2本のネジを切った柱が下方の駆動装置により回転し、セリを上下させる。

写真下（中）：大小幾つもの規模のセリの実施設計が了り、製作にかかる直前、「関西の某大劇場に於いて、出演者の衣装の裾がネジを切った柱に絡まり、演者はセリの上昇と同時に側を締め上げられて死亡した」報を受けた。此の態様の仕組みは我が設計のそれと全く一致する。筆者は咄嗟に演者の安全を判断し、我が設計のこれら全ての柱を金属板で完封する。且つセリ上にある演者が今どの位置（深さ）に在るかを確認し得るよう、該板を繋ぐ小穴の明いた鉄板（パンチングメタル）とするよう指示。更にこれらの対応策不要を唱える如何なる意見も排除する様関係各者に要請した。現今常識化したセリ安全対策の嚆矢である。一写真に仮付けした鉄板が見える。

写真下（右）回転舞台の回転中に発する轟音、及び回転舞台に内蔵する大セリ3基・中セリ8基・小セリ5基・ドブセリ1基それぞれの作動音は、奈落空間に於いては筆者が製作工場の仮組中に感知した程度を遥かに越える。国立劇場の場合、直径20メートル・高さ約17メートル、5階建鉄骨造建築物に匹敵し、セリを上下に作動させながら回転するのであるら、該空間内の反響音は想像を絶するのは当然であろう。然し今後の劇場建設計画に於いては、その規模に関係なく、此の事を中心に舞台音響、更に劇場空間全体の音響計画を検討する必要があるであろう。

すっぽんの駆動



スッコンの図(劇場訓蒙図)より。早稲田大図書館蔵(京都・西座の記録・南座の舞台裏 金井俊一郎)より。



大劇場の花道・中奈落島屋連絡通路を下げられたスッコン。演者の乗り降り等の安全の為、進入遮断、監視カメラのための警成設備が装置にも設備された。

花道は客席の中に役者が入って行く、正面の舞台から演技の場を拡げるための重要な壁とした舞台である。その存在が役者と共にあるという庶民・大衆の観劇を楽しむ雰囲気をつくり上げる。歌舞伎が今日まで発展してきたそもそもの要素として、非常に大きな役割を果たしてきたのであった。すっぽんはそれを一段と強めるために全く不可欠な存在である。それ自身が観客自身を、役者＝劇中に飛び込ませ自らを埋没させてしまう絶大な魔力をもつ。だからこそ本来的にその迫り上がりは絶対に

下座前と花道のすっぽんには、演技者全員が電力による上げ下げを徹頭徹尾激しく否定した。「すっぽんは裏方・引き手が引き綱を引いて花道に迫り上げるべきだ。ちょうど井戸掘りのヨイトマケと同じように、綱を手操って持ちかえる時に、一瞬間綱がたるんですっぽんの床がスッとわずかに落ちる。お客は忍術使いなどが花道に突然奈落の底から現れたのに目を疑うその瞬間、役者が止まると同時にちょっと落ち込む。そこで観客は思わずハッと息を呑む。その一瞬の客と役者に強いる緊張こそがすっぽんの命なのだ」と彼らはいうのである。そして「そんなことももし容れられぬのなら、この劇場に出演するのは一切断る」とまで息巻くのであった。確かに演者、演技そのもの、また観客にとって、その迫り上がる最中にハッとさせる「間」。それは正に絶妙な意義を持つ。特に役者・左衛次、中車等の「本物が演れぬならば、どんな装置にしようとか全く無駄だ」という主張は正に正論であろう。しかしコンピュータ、ロボットが人の行動を読むこの現在はいざ知らず、残念ながら当時それを機械的に実現するのは不可能なのであった。すっぽんは本来、切り穴の位置とか大きさ、人の力による迫りの上げ下げする速度が無段である。それら諸元が微妙に絡み合って成り立っている。そして役者の演技心と操作する人々の心のせめぎ合いによって機能するのである。操作する人手の確保に対する不安と、彼らの主張する正論とが、我が胸中に激しく交錯した。しかし、とうとう意を決して、その駆動は電動にすると断を下したのであった。

無機的な動力によるのではなくて、人の手、人の力によらねばならない。筆者自身このように考えるのであった。

電動にせざるを得なかったことが今なお心に引っ掛かる

注1) 発起人：河竹登志夫(日本演劇協会会長)／金井俊一郎(日本舞台技術総合研究所センター会長)／岡分正明(日本芸術文化振興会理事長)／内木文英(全国高等学校演劇連盟名誉会長)／中島八郎(舞台芸術家)／中村英代子(女優)／浜田真彦(劇団俳優連合代表)／藤城隆之(演劇評論家)／八橋章(演出家)／世話人代表：特田園(国立劇場舞台技術部長)。

注2) 文部省の外局ではあるが行政委員会の性格を有し、文化財保護法により独立してその職務を行う。その範囲においては文部大臣はこれを指揮監督することができない、と解せられている。他方、文部大臣は文化財保護行政に関し法律により委員会委員の任免権、財政会計事務の統括権等について権限を求める権限を有する。昭46.6(文化庁)となる。

注3) 閣議決定：昭31.4.17。会長：小宮豊隆、本委員：喜劇斗政孝(市川猿之助)他40名、臨時委員：伊藤国夫(千田是也)他40名、藤原義江(まべら)、高田せい子(パレエ)、安川加寿子(音楽・ピアノ)、後辺純雄(音楽・指揮)等。

注4) 設置：昭31.7.6(総会決定)。

注5) 本委員の他に臨時委員、演出家：青山達男他／演劇評論家：遠藤慎吾、吉川英史他／演劇研究者：町田嘉章、吉田崇三郎他／演者：三笠市川寿海、三世市川左衛次、十三世片岡仁左衛門、八世坂東三津五郎、近衛秀慈、藤原義江、芦原美子、中島島欣一他／舞踊家：花柳青耀(海老)、高田せい子／舞台装置家：三村亮太郎、長谷川勘兵衛、田中具他／照明家：遠山静雄、穴沢善義男／建築家：斎藤久夫、半澤重郎、小泉高四郎(舞台設備)、佐藤孝二(音楽)。

注6) 舞台照明家・立木定彦(後に舞台技術部長)他。

注7) 舞台機構設計者。宝塚大劇場(兵庫)。その他数多くの舞台設計を手掛ける。

注8) 芸術資料の調査研究展示、客席及び閉鎖行車、後座演技者の養成、その他それらに必要な空間の設定等。

注9) 特に左衛次、七左衛門、中車と意見がぶつかり合った。

注10) 市川猿之助(猿蓑)；明21(1888)～昭38(1963)／三世市川寿海；人間国宝・芸術院会員、文化功労者、明19(1886)～昭46(1971)／三世市川左衛次；人間国宝・芸術院会員、文化功労者、明21(1888)～昭44(1969)／八世市川中車；明28(1896)～昭46(1971)。

注11) 八世坂東三津五郎(後に人間国宝)；明39(1906)～昭30(1975)／市村明左衛門(後に人間国宝・芸術院会員、文化功労者)；大6(1917)～平13(2001)／片岡仁左衛門(後に人間国宝・芸術院会員、文化功労者)；明37(1904)

～平6(1994)。

注12) 竣工：昭和41年9月30日、開館：同年11月1日。

注13) 昭和29年(1954)9月、文化財保護委員会が重要無形文化財国家指定制度を機に国立芸術センター設置案を審議し、昭和30年、芸術施設調査費として国家予算250万円を確保し、7月、芸術施設調査研究協議会(小宮豊隆会長)を設置。昭和31年3月、文化財保護委員会「国立劇場設立基本要綱」を決定。同月、国立劇場設立準備費1200万円を国会で議決。4月、国立劇場設立準備協議会設置を閣議決定。8月、大劇場、小劇場、音楽大ホール、両小ホール、オペラ劇場、能楽堂等計1万8238坪、敷地1万1124坪確保すべき旨中興会中。昭和33年、敷地の決定後従多の変遷があり、昭和36年2月、日本の古典芸能専用の大劇場(1800席程度)、小劇場(650席程度)の建設を決定。

注14) 文化財を語る(1)～(11)

注15) 明治7年(1874)、西園寺公望らとフランスから帰朝した光妙寺五郎が十二世守田勘治と接し、国立劇場の必要性を説き、実現を回ったことから始まったといわれる。

注16) 建築の実質的な設計は国際設計競技によって岩本博行他13名が、内部の観客席その他は兼者が設計した。建築工事は官庁営繕工事の一環として建設省官務局が行った。

注17) 岸内閣、池田内閣の時代。

注18) 昭38(1963)、ニューヨーク世界博日本館2号館、日本財界の強い要請により、1、1、1(事務所)として竣工。事務所不測と判断、Chapman and Evans 事務所(当時アメリカ進出最高裁判所設計実績全米第3位)を落し、設計を完了した。(施工：ロワ社)

注19) 釜の繰速度max75.36m/m(1.2回転/分、4.52m/h)～min18.84m/m(0.9回転/分、1.13m/h)。

注20) 小劇場の回り舞台の構造は従、作動に一度の迅速性が求められ、大劇場のそれと同一方式に改められた。

注21) 名古屋：御園座の可動花道が我が国最初のものとして完成(設計：後藤一雄)。劇場関係者に好評であったため国立劇場にも同一方式によって設置することが決められた(設計：後藤一雄)。

注22) おかもちという。

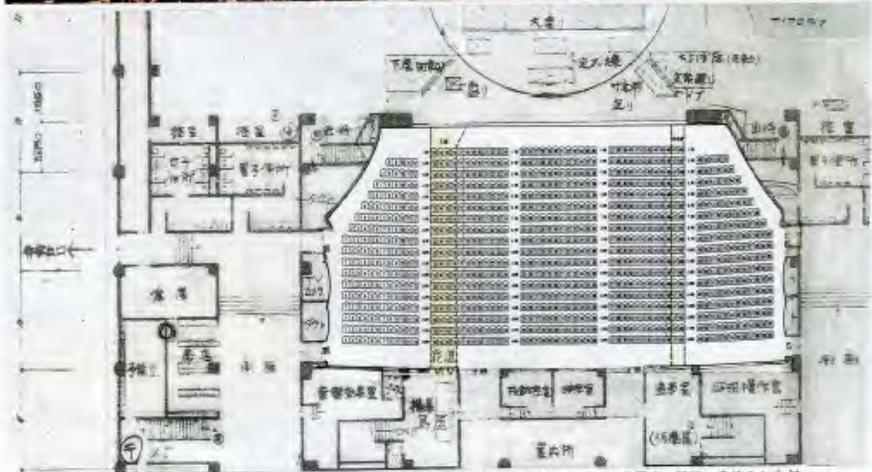
注23) 下座前及び花道の七三の位置。

注24) 切り穴の大ききの定式は2尺4寸角、1基2分割。通常はそのうちの一方を使用。

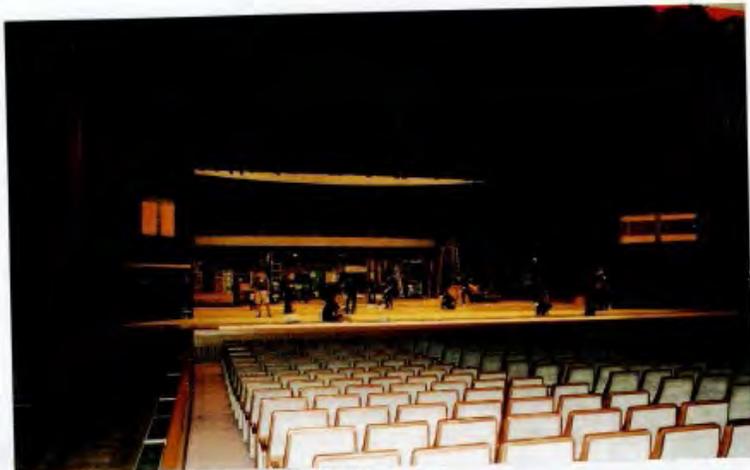
その1 歌舞伎舞台に欠かせぬ花道は上演種目の内容を高める重要な舞台であり、通常舞台開口の上手から下手に向けて概ね7：3の位置に置かれる。今花道は専門委員会により舞台開口幅が12間（約20m）と決められたから、上手大臣柱から8間半略15～16mの位置が望まれよう。然しこの大劇場の客席総数と寸法・配置、花道に繋げる鳥屋の規模・有り様等関係専門委の意を図面化すると、所謂上記定式的位置は大幅に舞台下手側に変更せざるを得なくなった。当然その位置は上演種目の演出効果の増進に影響する。然し筆者は専門委の意見を斟酌、その通りに設計、施工させた。結果的に一歩想通り一此の花道は劇場開場後暫くの間演劇関係者・観客の双方から激しい非難を受けた。前者は「上演演目・演技の本質」に繋がる異論が、後者は「ドブ席が窮屈・ドブから見難い」との意見が大半を占めた。

一方、演目によって花道を使用しない場合、該花道を撤去し客用椅子を其処に固定して客席数の増加を図る案が浮上。[※] 筆者は此処に72席が見込まれる事を確かめ、熟考の上同案を委員会に提議した。必然の事業費増よりも「市民サービスの拡大」、「将来市民の知的効果が一層増大にする事を期待」したい事が理由である。

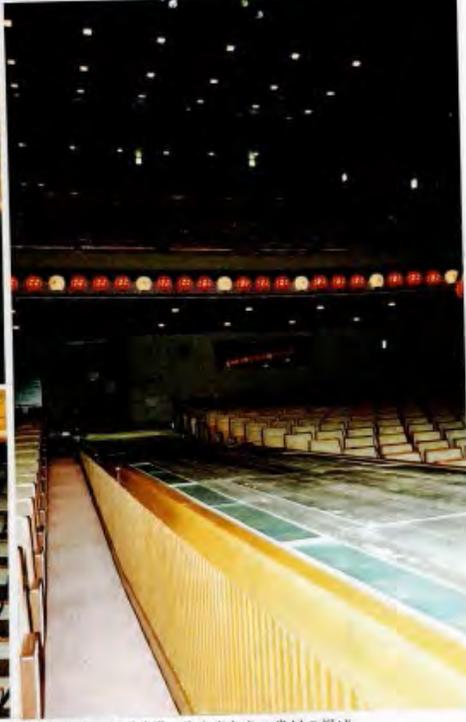
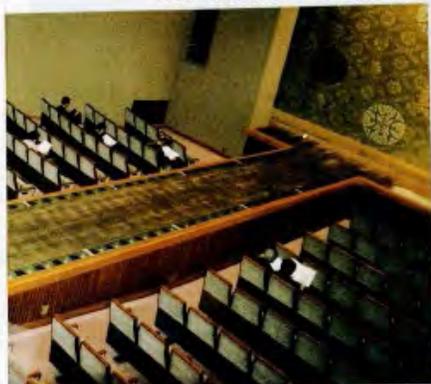
筆者は花道に関して、様々、諸般の事情を勘案して慎重に慎重を重ねて設計変更を行ったのであったが、特にそれらには今猶気懸りの糸を切れず在る。若しも今後劇場が大幅な改修を計画する場合、此れ等について一層広範な検討される事を強く望む。



※ 元々の提案は小劇場舞台機構を設計された東京工業大学後藤一雄教授、名古屋の御園座の設計・実働された経験からの緊急動議であった。筆者は竣工間もない御園座を視察し、熟考の上、移動花道に変更を決断した。演目上花道不要時には、花道を客席床以下にセリ下け、早変わり床に収納されていた仮設床及び客用椅子をスッポンを利用して一般客席床に上げて敷き詰め、其処に客用椅子を定着する。



写真上：大劇場舞台仕込み風景。平成15年（2003年）7月15日

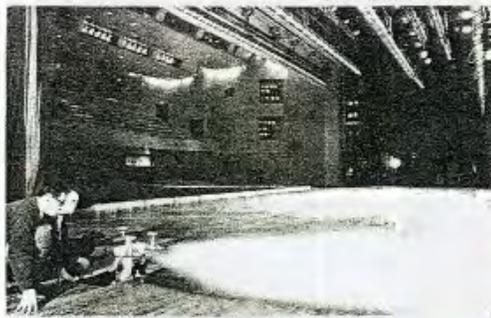


写真右：様々な演出を勘案、鳥屋口の開口高さを客席の天井一杯に定めた。正面花道の突き当たりで鳥屋の揚げ箱が見える。花道には2連のスッポンが本舞台端から約2間の位置に仕込まれた。

写真左中・同下：花道の舞台下手に寄り過ぎに因るドブ席が窮屈、客島の観劇に支障等、当時指摘しつつも解決し得なかった事項は将来必ず是正され、花道として「本来の在るべき形」に立ち戻るよう期待する。（写真：全て筆者写）

舞台袖・馬立・絵の具場

その2 一つの建物を完成させるとき、意外に絶対必要なものでもう一かり欠落させたまま事を進めて、最後の土壇場に至って大騒動となることが有る。東京三宅坂の国立劇場の例も実はその一つになった。建設にあたって10年余にも亘ってその将来のありようを仔細に検討し、施工だけでも3年をかけたというのである。竣工式の10日程前になって、「ヤヤッ、大変だ。絵具場がない。フォグマシンがない!」と相成った。建築・設備・舞台技術・演出等の関係者、建設省、そしてその全てを統括する筆者、その全員にとって絵具を溶く場所や煙幕（蒸気）噴出装置を取り付けることなどは余りにも常識であり過ぎた。所謂ボカである。



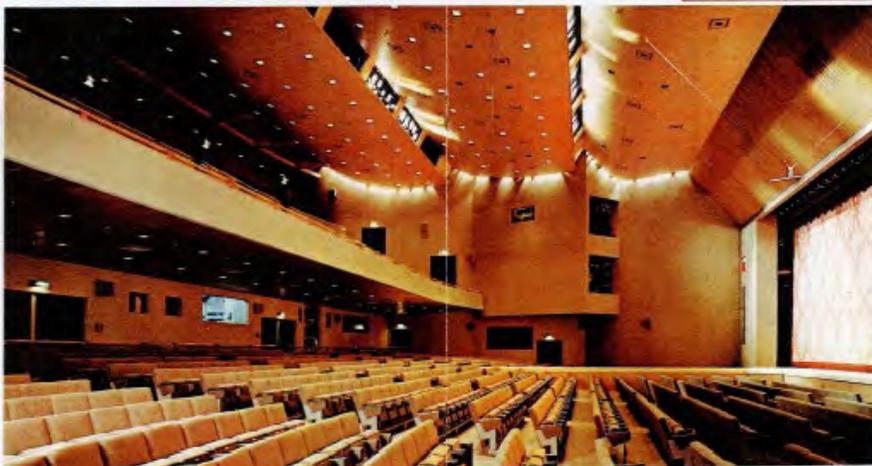
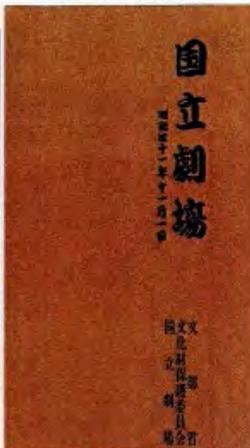
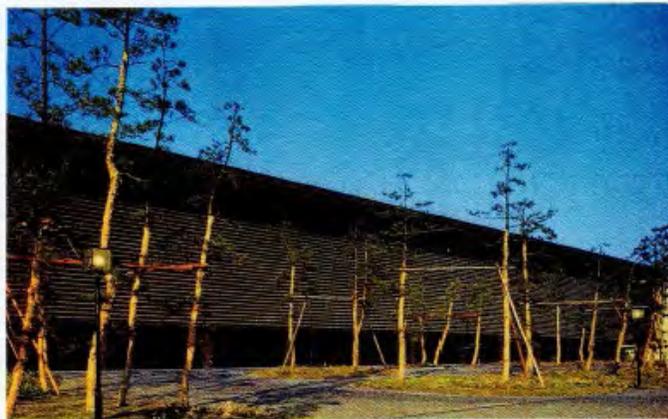
国立劇場・大劇場フォグマシン、「煙幕（蒸気）噴出装置」



写真上・下左：本来は馬立の場である一部を急遽舞台背景を創く絵の具場に当てた。写真下・右：絵の具場は開場時に緊急に復設したその形を40年経った現在も使用している。



（本頁写真全て筆者写）



明治以来百年、近代国家の体面を示す国立劇場建設の宿願が遂に実現した。昭和41年(1966年)11月1日開場式典が挙行政れ、記念品として建物・施設概要を解説するパンフレット・給養券・開場記念切手等が来場者全員に配られた。その中から大劇場客席、楽屋大廊下、稽古室、楽屋(側室)・大楽屋、総稽古室の写真を例に挙げる。



国立劇場が到来した喜びに地元（東京・千代田区単町）住民は明後年の竣工を待ちきれず、コンクリート打設中の工事現場で夏祭りを強行した。昭39(1964)8.15 筆者写

国立劇場の紋章

文化財保護委員会は国立劇場の建設の進捗するに伴い、日本の古典芸能からオペラ・現代劇に至る芸能を上演する国立劇場を象徴するシンボルマークを、同劇場設立準備協議会第三分科会（施設）委員を審査委員として公募した。然し良案が得られず、止むを得ず文化財保護委員会は吉田五十八審査委員長に改めて案作成を依頼。提出された案を以て国立劇場の紋章と正式に決定した。同案に就いて、吉田五十八委員長の説明を原文のまま以下に載せる。

「この国立劇場の紋章は、日本の伝統芸能の一大殿堂にふさわしい、天来の妙音を笙笛琴琵琶の楽器によって奏でる、衆天女の姿を紋章の中心に配し、その周囲は、六呂の音律に乗って、虹の如く空にたなびく、六流の天女の霓装を表現したもので、国を代表する劇場の品位に似つかわしい、優美と典雅をその主調としたものである。

（奈良・薬師寺・東塔の水煙より）」



花道奥の大劇場鳥居揚幕に染め抜かれた国立劇場紋章

注：寛衣（ゲイショウ）、帯は虹、傘のように美しい傘。夫人や姫女などの着る衣。（半澤）

国立劇場開場年

- 国立劇場：昭和41年（1966年）11月1日〔東京都千代田区単町〕
- 国立演芸館：昭和54年（1979年）3月20日〔国立劇場地内〕
- 国立能楽堂：昭和58年（1983年）9月15日〔東京都渋谷区千駄ヶ谷〕
- 国立文楽劇場：昭和59年（1984年）3月20日〔大阪市南区日本橋〕
- 新国立劇場：平成9年（1997年）10月10日〔東京都渋谷区本町〕
- 新国立劇場舞台美術センター：平成9年（1997年）11月～15年9月〔千葉県銚子市〕
- 伝統芸能情報館：平成15年（2003年）3月19日〔国立劇場地内〕
- 国立劇場おきなわ：平成16年（2004年）1月15日〔沖縄県浦添市〕



上：創立40周年〔平成18年（2006年）時〕の国立劇場



右：創立時の国立劇場（開館式典配布資料より）

国立演芸館 左端後方に伝統芸能情報館が見える





上：国立能楽堂
下：国立文楽劇場



新国立劇場 右端の高層建物は東京オペラシティ



伝統芸能情報館 左端の空中廊で国立劇場に繋がる



国立劇場おきなわ

写真：同劇場

表1 国立伝統芸能施設 施設概要

施設	1) 国立劇場	2) 国立演舞場	3) 国立能楽堂	4) 国立文楽劇場
所在地	東京都千代田区幸町4番1号	東京都千代田区幸町4番1号	東京都港区千代田4丁目10番1号	大阪市南区日本橋1丁目2番10号
敷地面積	31,249㎡(演舞場を含む)		8,039㎡	4,464㎡
構造規模	鉄骨鉄筋コンクリート造 地上3階、地下2階 延床面積 9,576㎡ 軒高 一般部分 14.0m 最高部分 23.4m	鉄骨コンクリート造 地上4階、地下1階 延床面積 846㎡ 延床面積 2,775㎡ 軒高 一般部分 16.74m 最高部分 21.5m	鉄筋コンクリート造(一部鉄骨造) 地上2階、地下1階、屋根1階 延床面積 4,608㎡ 延床面積 10,047㎡ 軒高 一般部分 11.1m 最高部分 18.8m	鉄筋コンクリート造(一部鉄骨造) 地上5階、地下2階 延床面積 3,926㎡ 延床面積 13,211㎡
内容	大劇場(客席数1,748) 小劇場(客席数800) 資料展示室・回収庫・図書室・喫茶・レストラン・録音録音室・試写室・稽古室・研修室等 駐車場(約100台収容)	ホール(客席数300) 展示室・回収庫・図書室・資料室・試写室・試奏室・研修室等	能舞台(客席数591) 修復能舞台(収容可能数200) 大講義室(席数160) 展示室・資料作り物収庫・図書室・喫茶・レストラン・研修室・稽古室・研修室等	劇場(客席数753) 小ホール(総稽古室)156) 展示室・回収庫・図書室・喫茶・レストラン・研修室・稽古室・研修室等
工期	昭和39年6月8日起工 昭和41年10月31日竣工 基本設計 松本博行他13名 実施設計 建設省	昭和52年12月17日起工 昭和54年2月24日竣工 解体解体大設計事務所	昭和65年5月7日起工 昭和66年2月30日竣工 大江建築事務所	昭和56年4月27日起工 昭和56年1月31日竣工 黒川紀章建築・都市設計事務所
設計監理				
工事監理	建設省 旭竹中工務店	建設大臣官房 官庁営繕部 旭竹中工務店	建設省関東地方建設局 建築監・住友建設共同企業体 松 狂喜	建設省近畿地方建設局 旭竹中工務店・建設共同企業体 文楽、歌舞伎、邦楽、祝儀、民俗芸能
上賞項目	大劇場 歌舞伎、邦楽、祝儀、民俗芸能等 小劇場 邦楽、祝儀、文楽、民俗芸能	客席、観劇、演目、その他の大衆芸能		

施設	5) 国立劇場おきなわ	6) 国立能楽情報館
所在地	沖縄県浦添市勢地3丁目14番1号	千代田区 代田区幸町4番地1号
敷地面積	24,000㎡	国立劇場敷地内
構造規模	鉄筋コンクリート造、一部プレストレストコンクリート造 地上3階、地下1階 延床面積 7,239㎡ 延床面積 14,729㎡ 軒高 23.1m 最高部分 23.7m	鉄筋コンクリート造 地上5階、地下1階 延床面積 445,08㎡ 延床面積 259㎡
内容	大劇場(客席数)オーブンスタージ578、 プレミアムスタージ692) 小劇場(客席数255) 資料展示室・回収庫、前室、リフレクシブ、録音・レストラン・録音録音室、試写観劇室、稽古室・研修室)などプラザホール、駐車場(522台収容)	情報展示室 図書閲覧室 ミュージアム 文化デジタルラ プラットフォーム 情報発信 事務室
工期	平成12年11月竣工 平成15年7月竣工 施設建築設計事務所	平成13年8月～同14年9月 (株)教育施設研究所 (株)竹中工務店
設計監理		
工事監理	内閣府沖縄総合事務局開発建設部 大成建設株式会社、伊藤工業株式会社	
上賞項目	重要無形文化財・能楽、伝統舞踊、沖縄舞踊、琉球歌劇、方言(11ヶ所)、琉球音楽、民俗芸能、本島の伝統芸能、アジア、太平洋地域を中心とする民俗芸能	国立能楽 日本伝統芸能と現代舞台芸術を全国の小中、高等学校等に発信し子供達の豊かな人間性と多様な個性を育む「文化デジタル・コイブライリー」構想を推進し、インターネットを利用した伝統芸能の情報発信のプラットフォームとして(伝統芸能情報館)創設後、日本芸術文化協議会理事員(園分正)氏挨拶文(平成15年1月会報)した

表2 新国立劇場の施設概要

	オペラ劇場	中劇場	小劇場
所在地	東京都港区千代田1-1-1		
敷地面積	26,889㎡		
延床面積	69,474㎡		
構造	鉄骨鉄筋コンクリート造、地上5階、地下4階、軒高40.3m、最高高さ40.9m		
客席数	1,810	1,058	340、376
内訳	バーケットフロア 868 メインバルコニー 354 裏2バルコニー 298 裏3バルコニー 296	プロセニウム形式 1,058 バーケットフロア 871 バルコニー 187	エンドステージ 440 センターステージ 420 メゾネットステージ 410 アリーナステージ 468
観劇時間	1.4～1.6秒(満席時)	1.0～1.3秒(満席時)	0.8～1.0秒
舞台の形状	主舞台 29.0×24.5×30.5H 上下半舞台 20.0×23.6 後舞台 22.5×20.6 主舞台床面積傾斜度10°	主舞台 27.2×20.8×21.8H 上下半舞台 16.7×20.5 後舞台 19.5×17.7(4階舞台) 前舞台可変	主舞台 27.3×16.4×6.0H 可動床 20.0×12.7 内 10.9×12.7(4階舞台) 劇舞台 9.8×3.3
オーケストラピット	4管(120名程度)編成1対1前舞台として使用可能	2管編成対応	
706.7cm	16.4W×12.5H	16.5W×9.0H	
大楽屋	2(67㎡/室)	2(54㎡/室)	
中楽屋	12(30㎡/室)	2(40㎡/室)	3(26㎡/室)
小楽屋	7(21㎡/室)	7(25㎡/室)	2(24㎡/室)
2ヶ所)	6(45㎡/室)	4(36㎡/室)	
工期	平成14年10月24日起工 平成15年3月25日竣工		
設計監理	基本設計 橋本博行、松本博行、園分正 実施設計 建設省		
工事監理	建設省 旭竹中工務店		
上賞項目	オペラ、バレエ等	演劇、現代舞台等	オーブンスタージによる上座形式を特長とした観劇体験

※ 観劇時間・観劇位置は開演時の公式記録

旧近衛師團司令部庁舎の保存再生
 — 国立近代美術館工芸館 —



皇居（特別史跡・江戸城）内施設配置鳥瞰図（皇居造宮記録より）

1. 二重橋 2. 新宮殿 3. 宮内庁庁舎 4. 桃華楽堂 5. 宮内庁楽部 6. 宮内庁書陵部貴重図書館 7. 天守台
 8. 旧近衛師團司令部（東京国立近代美術館工芸館） 9. 日本武道館 10. 国立劇場

〔下線の施設は筆者の直接設計・監理または建設に関与（指導）したものの〕

〔補〕 参考

- 2 新 宮 殿 : 昭和34(1959)～同43(1968)。設計者・吉村順三東京芸術大学校、施工途中に新宮殿造宮部長の一部自らの意匠に無断設計変更せるを理由に以後設計業務を辞退。嗣した部長は半澤に以後の設計及び工事推進方を求めて半澤宅を訪門。然し半澤は部長に彼の非を指摘、吉村氏の“考え方”を改めて服膺し、自らの努力により吉村氏の設計を実現すべきである。その実現には協力すると告げた。(cf. 松等)
- 新宮殿大舞楽台 : 設計・監理：半澤重信。〔昭和43(1968)11/14〕皇國・新宮殿落成式に先ち東廳にて宮内庁楽部完工記念「武徳楽」演奏・新開大舞楽台にて「振舞」の舞披露。天皇陛下（昭和天皇）・皇后陛下（香淳皇太后）・皇太子殿下・向美智子妃殿下臨御。天皇陛下の「お言葉」受。
- 4 桃 華 楽 堂 : 皇后陛下（香淳皇太后）の音楽堂〔昭38(1963)?設計：今井兼次〕。音・空調・一堂内空気環境その他宮内庁よりは是正方意見を求められ助言。
- 6 宮内庁書陵部貴重図書館 : 設計指導・監理：半澤重信。〔平成2(1989)設計：アーキヴィジョン・戸尾任宏（半澤推薦）〕。後日天皇・皇后陛下御台臨。
- 8 重要文化財・旧近衛師團司令部 : 〔明治43(1910)ノ3竣工、設計：陸軍技師田村鎮陸軍少将〕。東京国立近代美術館として再生〔昭和47(1972)ノ12～同52(1977) 設計・監理：半澤重信〕。
- 10 国 立 劇 場 : 設計監修・工事監理：半澤重信。〔設計公募・昭37(1962)9.1、当選岩本博行以下13名〕。着工・昭和39(1964)ノ8、竣工・同41(1966)ノ10.30、開場・同41(1966)ノ11.1

半澤重信

「緒」

我が国に於ける煉瓦建築の建造の歴史は、明治中期から昭和初期迄の略30年間に限られ、現在に遺るレンガ造建造物は何れの用途のものであっても日本の近代建築の技術史上貴重である。

特別史跡・江戸城北ノ丸地区内に建つレンガ造総2階の旧大日本帝国陸軍近衛師団司令部庁舎は建明治43年(1910年)に竣工した。国は永久に保存すべく昭和47年(1972年)重要文化財建造物に指定、指定理由は「レンガ造2階建の明治時代官庁建築の旧規をよく残す現存する数少ない遺構として貴重であり、中央および翼部を突出させて切妻面をみせ、全体を簡素なゴシック風の様式を整えているなど、明治時代洋風レンガ造建築の一典型である。」とある。

昭和52年(1977年)11月、日本の優れた伝統的美術工芸作品を収集・保存・展覧する東京国立近代美術館工芸館として開館した。我が国最初の近代建築を活用した国立の美術館であり、創建当初の煉瓦造建築の姿其の既再生した貴重な建物である。

昭和38年(1963年)、政府は皇居周辺北ノ丸地区を森林公園に整備するのに伴って、荒廃放置された此の建物を撤去することを第二次池田内閣の閣議で決定する。然しそれは日本建築学会や識者等の強力な保存運動によって覆されるところとなり、同じ北ノ丸公園地区に建つ東京国立近代美術館工芸館として生まれ変わることになった。

曾ての旧海軍省等煉瓦造庁舎の保全・新設を官庁官署の立場から様々に手掛けられた経験者の談によると、煉瓦造の規模にもよるが通常は壁体の中に鋼帯が仕込まれたと云う。然し総延長 約290m・高さ 19m もの壁構造になる煉瓦造建物の補強の為に壁体内側に鋼帯を取り付け、建物全体の強度を確保するのは如何なる施工方法によっても難しく、寧ろ誤りとも云えよう。筆者自身、煉瓦造建造物の保存整備に關した幾つかの経験の中にも煉瓦壁体の構造強化を目的に鋼帯を仕込んだ例は無い。種々熟考の末、筆者は此の煉瓦造建造物を建築基準法の定める壁式鉄筋コンクリート造に発想を替え、且つ、建物が重要文化財指定されたその条件を遵守すべく、既存の煉瓦壁及び屋根等を其の屋外装として装着し、忠実に新コンクリート建造物の外部意匠とする事を決めた。また建造物の保存工事として2年と予定した工期を、「新たに導入する施工技術・新美術館に必須な整備と総事業費の増を併せ勘案して、8年を目処に考えたい。」と関係各位と委員会に提案した。そして全員から深く理解され、承認を得る事ができた。

此の内容は其の既施工に移され、昭和48年(1973年)1月着工し同52年(1977年)11月1日竣工した。開館式典が始まったのは11月15日 午前10時であった。

筆者は此処で改めて関係各位・参集され諸氏に心底から感謝した次第である。

平成30年(2018年)3月31日

半澤重信

Handwritten notes and signatures at the bottom of the page, including names like 半澤重信 and 技術会理事.

目的

- (1) 重要文化財建造物・旧近衛師団司令部庁舎をとして創建当初の状態に復元し、その永久保存をはかる。
- (2) 東京国立近代美術館工芸館として再生し、日本の近代工芸作品を収集・保管して公衆の観覧に供し、且つ関連する調査研究及び事業を行う国の本拠とする。

設計の趣旨及び設計条件

重要文化財建造物指定説明による建造物保存の意義及び美術館再生委員会の意見・要望を実現する。此のため以下の事項を設計の条件として挙げる。

(1) 重要文化財・建造物の保存の為の建築構造の変換。

既存の現煉瓦壁内側に鉄筋コンクリートを打設し、該建造物を煉瓦造から鉄筋コンクリート造に変換する。且つ既存建造物の煉瓦壁及び木造屋根を其の屋外装及び屋根(小風組を含む)として活用する。一鉄筋コンクリート造2階建・防水を施した屋根スラブ上に既存木造屋根を置く。

(2) 空調・防災その他-展示・保存資料安全設備の整備

すべての資料の安全な恒久保存と展示の為、建物内の光・湿熱・空気質に就いて、省エネルギー及び将来の変更が可能且つ容易であることを趣旨として、現代に於ける可能な限りの最先端技術を適用し、整える。一極大化する建物の熱容量を考慮、空調を空気・水を熱源とするヒートポンプ方式とし、太陽光の外壁への灼け込みによる室内の湿熱変化を防止する為に、全ガラス窓にアルミ蒸着テロン製カーテンを吊り外光の反射を謀る。且つ該内側に吸脱湿性の高い厚手布製カーテンを挿し、室内の温度・湿度の日較差を最小限に抑える。

(3) 設計

展示室に於けるデスプレーは 谷口吉郎氏に館側が委嘱した。

工事監理: 半澤重信(谷口吉郎氏の指名による)。

建造物保存設計・監理: 市川岩雄+半澤重信(文化庁)

美術館建築設計・監理: 半澤重信

設備設計・監理: 中村 恒(新建築設備設計事務所)+半澤重信

設計 ~ 竣工 期間: 昭和47年(1972年)10月(筆者参画) ~ 同52年

(1977年)11月1日 - 延べ61ヶ月

開館: 昭和52年(1977年)11月15日

施工: (株)竹中工務店

Handwritten notes and numbers (70, 11, 13, 14) on the right side of the page.

ニュース

●発注者 ●設計者 ●施工者 ●工期 ●敷地面積 ●建築面積 ●延べ床面積
●構造・階数 ●屋根仕上げ・外装・外回り建具 ●工費 ●コメント

●東京国立近代美術館工務院（重要文化財 旧近衛館司舎部）
千代田区本丸公園
●文化庁 ●文化庁文化財保護部保護課 谷口武郎（展示室設計）、（原設計・建築技師 田村謙） ●竹中工務店 ●1973年1月～1977年11月 ●3,951㎡ ●929㎡ ●1,858㎡ ●RC構造 床高+2 ●天然スレート文字瓦 ●煉瓦・木製上げ下げ窓、アルミサッシペアガラス開き戸 ●日連丹

この建物は重要文化財に指定されているため建築基準法の適用は原則として受けないが、建物の今後の利用の公共性から安全度については同法に完全に適合せしめている。

明治43年竣工の後、屋根、軒回りその他に幾度か改築がなされていたが今回すべてこれは竣工当時の姿に復元した。しかし、煉瓦壁は各壁すべてに垂裂が激しく、また不同沈下も最大200ミリ余りもみられたため、RC造壁式による構造体を各室の内側につくり、その各構造体を一枚の水平スラブ（2階天井床板）で連繫せしめた。このため、基礎には45センチ厚の耐圧版を、1階および2階の壁には最大20センチ、28センチ厚の鉄筋コンクリート壁を打ち、従来の煉瓦は扉にその外装材として扱った結果になった。鉄筋コンクリートと煉瓦との緊結に要したH、アンカーは4本/㎡(600Kg/cm²)である。

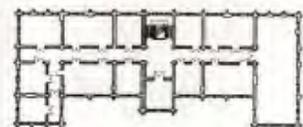
1階に木工芸品の分野別に収める収蔵庫、研究室、事務室、機械室を、2階に展示室を、小部屋に機械関係室を配して展示、収蔵する品物別、材質別にそれらに最も好ましい状態に近く調整出来る空調・制湿方式を水および空気熱源のヒートポンプ・デジタル表示によって行う事とした。このための機械能力は15US冷凍トン6台、受電電力は220KVAである。展示室の意匠は金口吉郎博士の設計になるが展示のための照度は150～400ルクス、各展示室共必要に応じて更に高照度を得られるように、また写真撮影用の大口径コンセントも設けている。展示ケース内には慎重に検討した結果、空調設備は付していない。1、2階ロビー等の照明器具はついに資料が得られず、止むを得ず同年に完成した重文旧日本生命九州支店の器具にならってまでしてみた。本来は建物の性質上ごく簡素なものであったろうが、今後のこの建物の生き方からこの様な意匠の照明がここにあってもよいかもしれない。外灯についても同様である。

これらに要した期間は調査期間も含んで昭和47年11月～52年11月の実に11ヵ月となった。

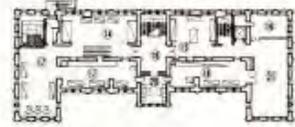


昭和5年当時の近衛館司舎部（小林友一氏撮影）

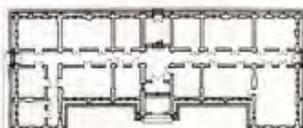
- | | | | | | | |
|-------|----------|-------|-----------|--------|--------|----------|
| 1 棟元室 | 4 特別展示室 | 7 研究室 | 10 機械関係室 | 13 展示室 | 16 事務室 | 19 機械室 |
| 2 展示室 | 5 木工芸展示室 | 8 展示室 | 11 木工芸展示室 | 14 機械室 | 17 展示室 | 20 機械室 |
| 3 展示室 | 6 展示室 | 9 事務室 | 12 土庫 | 15 木工室 | 18 ロビー | 21 特別展示室 |



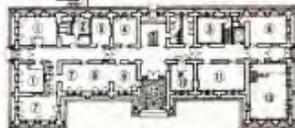
2階平面図



2階平面図



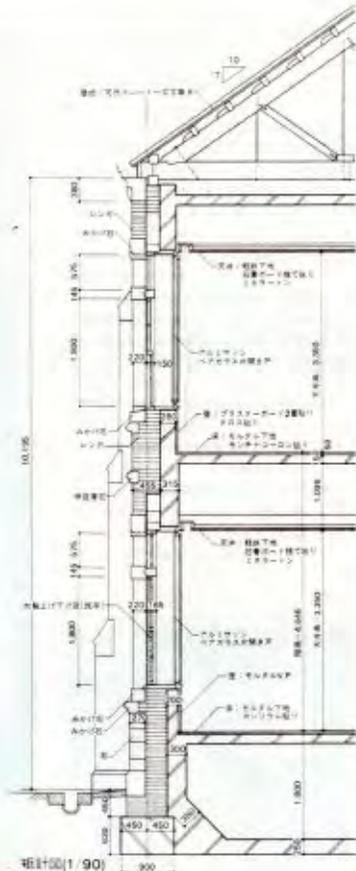
旧近衛館司舎部1階平面図(1/1,000)



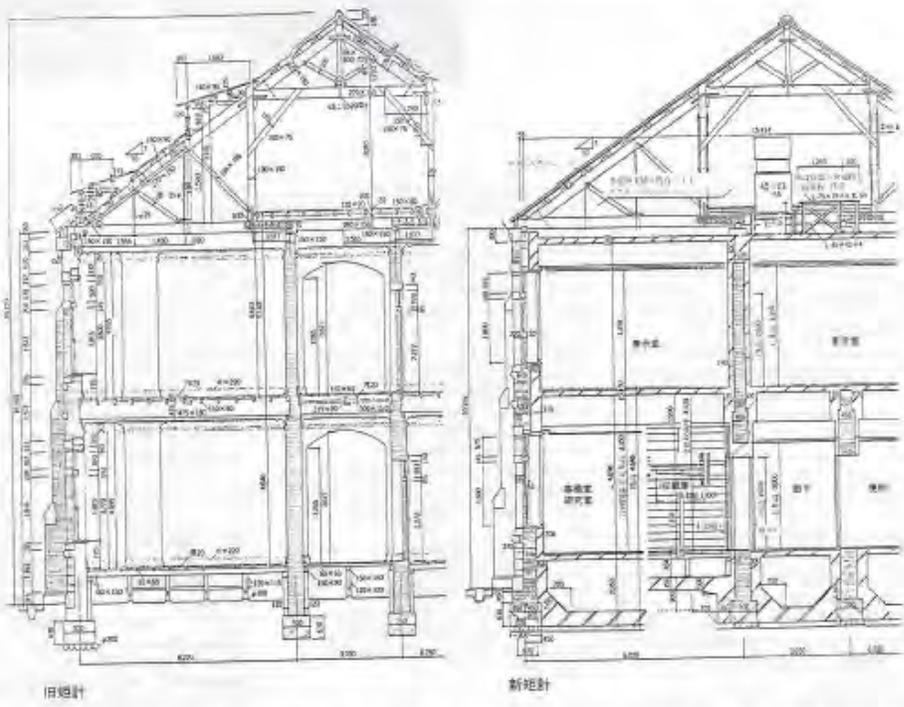
1階平面図(1/1,000)

〔写真〕多田 正樹

最新の情報をお知らせします。写真とともに、概要、コメントをお送り下さい。
送り先：〒101 東京都千代田区千代田2-1-2 日経マگزフェビル社 NA編集 BNデスク
〔電話〕03-270-8987



標準床：電気室及び機械室の天井高を確保するため、新設する地下圧力管の上を標準床と定めた。



明治43年竣工の後、復元、軒回しその他に幾度かの改変が加えられてきたが今回すべてこれらは竣工当時の姿に復元した。しかし、復元壁は各層すべてに亀裂が数多く、また不同沈下も最大200ミリ余りみられたため、RC造壁式による構造体を各室の内側に作り、その各構造体を一枚の水平スラブ(2層天井床版)で連結せしめた。このため、基礎には45センチ厚の鉄筋版を、1階および2階の壁には番太20センチ、28センチ厚の鉄筋コンクリート壁を打ち、従来の煉瓦は単にその外装材として扱う結果になった。換気コンクリートと煉瓦との間接に要したHアンカーは4本/m²(800Kg/cm²)である。

1階に各工芸品の分類別に収める収蔵庫、研究室、事務室、機械室も、2階に展示室も、少壁間に機械間保護を配して展示、収蔵する品物別、材質別にそれぞれに最も好ましい状態に細かく調整出来る空調・制湿方式を水および空気熱源のヒートポンプ・デジタル表示によって行う事とした。このための機械能力は15US冷源トン5台、空圧電力は228KVAである。展示室の裏には各品目吉田博士の設計になるが展示のための照度は150-400ルクス、各展示室が必要に応じて更に高照度を得られるように、また写真撮影用の大口径コンセントも設けている。展示ケース内には慎重に検討した結果、空調設備は付し

ていない。1、2階ロビー等の照明器具はついに資料が得られず、止むを得ず兩年に完成した東京国立生体九州支館の器具に代わった。本来は建物の性質上ごく簡素なものであったらうが、今後のこの建物の生き方からこの様な器の照明がここにあるのもよいかもしれない。外灯についても同様である。これらに無した期間は調査期間も含んで昭和47年11月-52年11月の実に61ヵ月となった。この建物は重要文化財に指定されているため、建築基準法の適用は原則として受けないが、建物の今後の利用の公共性から安全度については別途に完全に適合せしめている。

リサイクリング(保存再生)時代の本格的な展開

村松貞次

近代美術館工芸館の開館に当たって

旧近衛師団司令部の赤レンガ2階建ての建物が国立近代美術館工芸館として再生し、昭和52年11月15日にオープンした。古庁建築としては近ごろない見事な改修保存計画の成功例として記録に残るものとなる。オープンに先立って私は二度ほどこの建物の再生ぶりを見学する機会があった。うち一度は文化庁においてこの建物の保存整備計画を実際に担当された建築物の中央連絡所の熱心な案内と説明をいただいた。私の研究員が担当し東工大産学協会の奨励会が主催した「近代建築の保存の諸問題と記録保存の手法」と題するセミナーの翌年であった。私の最初の強い印象は、小型ながらもよく性格の良い機能的設備の充実した近代的な美術館の傑作ということであった。そして芸術館司令部の建物という印象とオーバーラップして、いささかアサクラな表現ではあるがコンパクトにまとめられた静寂さと静寂洋風といった、きわめて軟弱的なものを感ずる。あるいはそのマテリアルは太田町建築特産品のもの、新しい時代へ向けての保存・再生にかけている熱意の反映したものであるのかもしれない。

内装が変わらなければダメだ、といわれていたが中内装の誕生とともに、一転してこの建物の保存決定した。それまでの間、空室として放置されてこの建物のひどい荒れようは見るも無惨であった。昭和47年10月に「明治時代官庁建築の旧蔵をより残す保存する数少ない遺構として貴重であり……」というマテリアルは大田町建築特産品のもの、新しい時代へ向けての保存・再生にかけている熱意の反映したものであるのかもしれない。

内装が変わらなければダメだ、といわれていたが中内装の誕生とともに、一転してこの建物の保存決定した。それまでの間、空室として放置されてこの建物のひどい荒れようは見るも無惨であった。昭和47年10月に「明治時代官庁建築の旧蔵をより残す保存する数少ない遺構として貴重であり……」というマテリアルは大田町建築特産品のもの、新しい時代へ向けての保存・再生にかけている熱意の反映したものであるのかもしれない。



この建物は明治42年3月に竣工したもので、設計は陸軍技師の田村清、明治38年の大工建築の出身で、同様に葛野社一助や中村幸次郎がおり、一級上には大工新次郎が、一級下には前田信一郎や松井素太郎がいた。建築はゴシック様式で煉瓦造、要所に石材を用いている。その正面の意匠は、この建物の後方にあるウォートルの有名な竹橋邸(明治4年、佐野清吉)の正面を大きな三角形の切妻によって強調した特徴的なファサードをあるいは意識していたのかもしれない。大正12年の関東震災で被害を受け、スレート葺きだった屋根は銅瓦葺きとなり、新瓦葺をRCの梁で補強するなどの改修があったようだ。また昭和16年には屋根裏部屋を削いで半蔵金庫とし、それに伴って明り窓が削げられた。屋根は金庫警備の要などに転用されていたが、昭和28年皇宮周辺北地区の森林公園化計画の進展とともに昭和41年1月住居内装の協議保存協定として取りおこし決定した。これに対して保存の経緯が各分野から強く出された。昭和44年3月17日付日本建築学会会長田島勇吉で文部大臣その他に提出された「旧近衛師団司令部庁舎の保存についての意見書」はその代表的な動きということがきよう。私もその提案に参加したが、設計者、太田町太郎らの建築界の大先輩の熱心な奔走が今でも印象に残っている。協議の決定がいかに難かしく長いものである。近衛師団関係の旧蔵入りの保存要望運動が、重要文化財に指定された経緯を政府を迫り強化させてきたこと、今日由緒文化庁長官がその功績にあって熱心に動いてくれている。などの噂もその間に耳にした。とにかく、科学技術館、近代美術館、国立公文書館などの建築を刷新して、全国統一の建築法によっても建築の存在するスペースは少ない。という論理で発行者のこの建物をとりこみ、というものが、なによりも私の心にとまったことにもなっている。

内装が変わらなければダメだ、といわれていたが中内装の誕生とともに、一転してこの建物の保存決定した。それまでの間、空室として放置されてこの建物のひどい荒れようは見るも無惨であった。昭和47年10月に「明治時代官庁建築の旧蔵をより残す保存する数少ない遺構として貴重であり……」というマテリアルは大田町建築特産品のもの、新しい時代へ向けての保存・再生にかけている熱意の反映したものであるのかもしれない。

5. 国立劇場本館の建築評価（概要版）

参考資料 4-19 国立劇場本館の建築史的評価（概要版）

国立劇場本館の建築史的評価（概要版）

東京工業大学名誉教授・工博／近代建築史
藤岡 洋保

1. はじめに

本報告書は、独立行政法人日本芸術文化振興会の依頼を受けて、現在進められている国立劇場再整備にかかる、東京都千代田区準町 4 番 1 号に建つ国立劇場本館（1966 年 10 月竣工、写真 1～3）の建築史的評価について記したもので、現在の国立劇場本館を、複合機能をほぼ正方形の平面にうまく納め、高さを抑えつつ、プレキャスト・コンクリートの校倉造り風のモチーフを建物の四周にめぐらせ、その頂部に大きく張り出して水平感を強調したもので、国立劇場としての品格を示すためのあり得る手法を示したものと、また景観に配慮した建物としても評価している。なお、本概要版作成に関しては、同建物の建設に先立って行われた設計競技（コンペ）実施にかかわる資料や、国土交通省大臣官房官庁営繕部提供の当選案、当時の新聞雑誌、独立行政法人日本芸術文化振興会提供の資料を参照した。

2. 建物の諸元

国立劇場本館の建設時の諸元は以下の通り。

基本設計／岩本博行ほか 13 名（竹中工務店大阪本店設計部）竹中工務店大阪本店設計部
（部長：岩本博行）

実施設計／建設省営繕局、設計監修／岩本博行ほか

施工者／竹中工務店東京本店

構造階数／鉄骨鉄筋コンクリート造一部鉄骨造地下 1 階（中地階付き）地上 3 階建て

敷地面積／30,047.83 m²

建築面積／10,807.10 m²

延床面積／26,988.77 m²

客席数／

（大劇場）1 階：1,060 席（花道部分 95 席を含む）

2 階：420 席

3 階：266 席

計：1,746 席

（小劇場）1 階 630 席（花道部分 72 席を含む）

計 630 席

ほかに、資料展示室、図書室、録音録音室、試写室、演劇・舞踊・音楽用練習室、管理関

係室、駐車場（約 240 台）

軒高／一般部分：14m

最高部分：23.4m（独立行政法人日本芸術文化振興会提供資料をもとに作成）

なお、その後の改修にともない、劇場の現在の席数は、ゆとりを持たせて、大劇場 1,616 席、小劇場 594 席になっている。

3. 建設経緯

国立劇場設置の要望は明治時代から出されていたが、実現に向けて動きは始めるきっかけは、1950（昭和 25）年の文化財保護法制定の際に、「無形文化財」という概念が新たに導入されたことにある。当初は、衰亡の恐れがある芸能や祭りだけがその対象とされたが、1954（昭和 29）年の同法改正で、より積極的な「無形重要文化財」として位置づけ直された。国が、伝統芸能の文化財的価値をオーソライズしたということである。それに呼応して、1955（昭和 30）年 9 月に文化財保護委員会（文化庁の前身）に「芸能施設調査研究協議会」がつくられ、その答申をもとに、翌 56（昭和 31）年 3 月に「国立劇場設置要綱」がまとめられ、それを受けて「国立劇場設立準備協議会」を設けることが翌月に決まった。

その後敷地の選定や、芸能諸団体間の調整に時間を要したが、1962（昭和 37）年 7 月に、1,800 人収容の大劇場、700 人収容の小劇場に、資料収集および調査・後継者養成組織、それに管理部門を加えた延床面積 23,500 m²、工費 23 億円の建物をつくるという計画がまとまり、その設計案をコンペで募集することになった。その審査会は以下の 9 名で構成されていた。

伊藤嘉朔（1899-1967：東京美術学校卒、舞台美術家、美術監督）

内田祥三（1885-1972：会長、東京帝国大学卒、建築構造学者、東京大学名誉教授・元総長）

河竹繁俊（1889-1967：早稲田大学卒、演劇学者 [歌舞伎史研究など]、早稲田大学教授）

岸田日出力（1899-1966：東京帝国大学卒、建築家、東京大学名誉教授）

高橋誠一郎（1884-1982：慶應義塾大学卒、経済学者、慶應義塾大学名誉教授、元文化財保護委員会委員長、日本芸術院長、日本舞踊協会会長）

谷口吉郎（1904-79：東京帝国大学卒、建築家、東京工業大学教授）

細川護立（1883-1970：東京帝国大学中退、細川家当主、文化財保護委員会委員、美術愛好家 [日本美術刀剣保存協会会長など]、東洋文庫理事長）

村野藤吾（1891-1984：早稲田大学卒、建築家）

吉田五十八（1894-1974：東京美術学校卒、建築家、東京芸術大学教授）

審査会で承認されたコンペの応募要項が 1962（昭和 37）年 9 月 1 日に告示され、翌 63（昭和 38）年 2 月 28 日の締め切りまでに 307 点の応募があった。審査会での数度の討議

を経て、同年3月27日に当選者が発表され、岩本博行（1913-91：都島工業学校卒）を代表とする竹中工務店大阪本店設計部の案が1等に選ばれた。

その後、その当選者を顧問に、建設省の管理のもとで実施設計がまとめられ、竹中工務店東京本店の施工で1966（昭和41）年10月に竣工し、11月1日に開場式と栞落としが行われた。

4. 設計趣旨

敷地（図1）の面積は3万㎡強で、延床面積約27,000㎡の建物を建てるのに十分なように見えるかもしれないが、その地下には首都高速道路3号線と4号線、そしてその換気設備を納める建物（平面が約39m×24mで4階建て、図2）の位置が指定されており、それを避けて建物を配置することが求められていた（『国立劇場設計競技募集要項』による）。さらに、豊ヶ岡一団地官公庁施設の都市計画上の制約から、建蔽率は40%以下とされていた。また、当時の当該敷地の地域指定は「住居地域」で、その高さ制限は20mだった（フライタワー一部がそれを越えることについては、東京都の承認を得ていた）。敷地の東・西・北にアクセス道路があるが、観客・役者・事務方・資材搬入出の動線を明確に分ける必要があり、250台前後の駐車スペースも求められていた。ちなみに、伝統芸能用の劇場ではあるが、コンペ要項には、和風意匠を示唆するような条項はなかった。

コンペ募集の募集要項では、小劇場（コンペ時には「小ホール」と呼ばれていた）は、古典芸能伝承者の養成施設とされ、文楽、邦楽、邦舞の上演も想定されていた。実施設計の際の計画変更で、養成の場ではなく、文楽や舞踊などを含む多目的使用の劇場になった。

実施設計（図3～10）では、コンペ1等案と同じく、大・小劇場が並列し、その手前の1階に玄関ロビー（写真4）が付き、大・小劇場の舞台裏に隣接して楽屋が並び、浴室やトイレ・小食堂などの付属施設が配されている。

おもに歌舞伎や舞踊の上演に用いられる大劇場（写真5、コンペ時には「大ホール」と呼ばれていた）の1階では、舞台が幅広に、かつ深くとってあるだけでなく、舞台両脇に大きなスペースがとられている（差し渡し寸法「プロセニウムの幅22mを含む」約64m×奥行約27m）。両脇を含めた舞台の面積が客席の面積の2倍半もあるというのは、当時の伝統芸能の劇場の中では最大で、舞台脇に大道具などを配して、場面転換が容易にできるようになっている。舞台中央には直径20mの廻り舞台があり、そこには1台の大迫り（3分割）、1台の中迫り（8分割）、5台の小迫りが配されている。そして、役者の生の声が客席後ろまで届くように、残響時間を1秒程度にするため、天井に曲面状の反響板を配している（NHK技術研究所の指導による）。また、花道は、電動で上げ下げできるようになっており、下げたときにはその上に客席が設けられる。その花道には2台のスッポンが隣り合わせに配され、別々に、また同時に上げ下げできるようになっている。

小劇場（写真6）は、先述のように、文楽や邦舞などの多目的のもので、ここにも上げ下げ可能な花道がついている。舞台中央には直径12.7mの廻り舞台があり、大迫り・前迫り・中迫り（6分割）が1台ずつ、小迫りが4台配されている。そして文楽用の迫りが2台つ

ていた（その後撤去）。

小劇場の舞台上の奈落の裏手には大道具製作室があり、そこから、屋体や諸道具を大迫りで大・小劇場の舞台上に上げることができる。地下には他に、搬入出口と荷降ろし室、大小道具の収納場所や機械室がある。

以上のような舞台機構は、建設当時においては、国内のほかの劇場を凌ぐ、最高水準のものであった。

2階正面側には、大劇場の客席や、客用ラウンジと大食堂、貴賓室があり、背面側に事務関係諸室や伝統芸能伝承者の養成関係諸室が並ぶ。小劇場舞台裏側には大稽古室があり、その長方形平面の長辺は18.3m、短辺が14.3mで、それぞれ大劇場と小劇場のプロセニウム幅に近い寸法にして、本番を想定した稽古ができるようになっている。さらに、録音設備を備え、稽古の様子を撮影することもできる。

そして3階には、正面側に大劇場客席と客用ラウンジがあり、背面側には資料展示室・図書閲覧室・試写室・録音室など、伝統芸能の資料収集・展示のためのスペースが並んでいた。

上記の大小のヴォリュームからなる諸施設を、来場者ごとの動線分離を図りながら、四辺がほぼ正方形の平面（正確には、96,250mm×100,100mm）に納めた手腕は評価できる。大・小劇場のフライタワー後ろに、幅3,850mmの細長い光庭を設けて、3階裏側の諸室や小劇場2階背面の諸室に採光できるようにしてあるのも、良い工夫といえる。

ちなみに、平面のモジュールは7,700mm×7,700mmで、その半分の3,850mmが適宜併用されている。7,700mmという寸法寸法は大劇場舞台の奥行き（7,700mm×3.5=26,950mm）に対応して決められたとみられる。なお、コンペ1等当選時のそれは7,800mm×7,800mmだった（その舞台の奥行きは7,800mm×3=23,400mmで、実施案より3,550mm狭かった）。

立面は、校倉造り風である（図8）。コンペ当選直後に、建築評論家の川添登（1926-2015）や宮内嘉久（1926-2009）が、過去の建築様式を適用したものとして批判したが、それは彼らがモダニズムの熱烈な信奉者だったからである。しかし、当選者の岩本博行は、そのモダニズム自体に疑問を感じていた。それは、建物竣工時のインタビューで、

「私は現代建築というものに失望したといったら大きいですけれども、あまりいい方向にいないと思うのです。現代建築の中でもっともうまい建築に出会ったとしても、それが古典の様式建築とくらべて、どちらがすぐれているかという比較をしたとき、私はやはり古典の様式建築のほうが勝つと思うのです。（中略）古いものの中から新しい要素として現代にアプライできるものを取りだそうということです。校倉という様式にはモダンがあると思うのです。だからそのまま現代建築に再現していてもモダンが表現できると思いました。（中略）校倉の表現でつくっても、けっして古いという感じをもたずにすむという私の感覚です。私は日本の古い建築の中にはモダンの要素がいっぱいあると思うのです。形をそのまま踏襲するという点について、非常に軽べつするようなこ

とをよくいいますけれども、私は民族の心が底にひそんでいる形というものを否定すべきでないと思うのです。(中略)私はやはり様式というのは長い岡民族が洗練して積み重ねて、修正してきたものだけの強さがあると思うのですよ。芸術というのは進歩しないといいますが、芸術にも積み重ねはあると思うのです。だから様式には民族の総和の力あるいは心、また知恵というものがあって、非常に強いものだと思うのですよ。ところが、現代建築は個人の力だけでやっているわけでしょう。私はやはり民族の総和と、天才であっても個人との対決では、やはり民族のほうが勝つと思うのです。(岩本博行・浜口隆一「対談 現代建築と様式」：『新建築』1966年12月号、pp.139-142)

と応えていることに示されている。岩本は、設計において、時間をかけて形成された、歴史的な「型」を超えるのは難しいという謙虚な態度を示しており、その「型」のエッセンスを踏まえながら、表現のレベルを高めたいと考えていた。要するに、モダニズムが完全ではないことを認識し、古典の「型」を適用することでデザインをあるレベル以上に保ちつつ、その「型」の背後にある精神を尊重しながら、モダンにアレンジするというのが彼の設計姿勢だった。彼は、伝統を安易にコピーしようとしたのではなく、過去のモチーフに現代的意味を見出し、近代技術を利用して設計していたということである。

この劇場の場合、立面が非常に横長になるだけでなく、窓をたくさんつける必要はなく、四周が壁で覆われることになるので、その水平感を強調するために水平線を上下に並べることとし、その「型」として校倉造りを採用したということだったと考えられる。

また、岩本博行は景観を重視する建築家でもあった。それは、建築評論家・浜口隆一(1916-1995)が彼の建築観に言及した、以下の文章にうかがえる。これは、1962(昭和37)年3月のコンペの当選発表直後に、岩本が、佐賀・唐津で開かれたシンポジウムに、パネリストとして呼ばれたときの発言を記録したものである。

「私はこの月の末に、九州の有田、唐津でやった〈業業と建築を結ぶシンポジウム〉でも岩本さんと顔を合わせた。彼がこの会に招待されたのは、福岡の天神ビルその他で、タイルの造形表現力をもっとも積極的に開発している建築家だ、と考えられたからである。そのとき彼はタイルについて、民家の屋根が瓦で黒色で、それが波のようにうねって街の眺めを美しくしているように、タイルの壁も1色がいいというタイル単色論をのべた。」(浜口隆一「国立劇場コンペ当選案の人たちをたずねて ― 組織と個人 ―」：『新建築』1962年5月号、p.100)

ここで言及された、岩本の「単色論」は、国立劇場コンペ1等当選案に、そしてその実施設計においても見ることができる。コンペ当選時の案(図10)では、外壁は白一色で、その前庭には白砂利を敷き詰めることになっていた。岩本の言によれば、この白色は、虎の門のアメリカ大使館公邸の白壁を彼が高く評価していたことによるものである。上掲の引用にうかがえるように、岩本は、民家の瓦のモノトーンで構成されるような景観を良しとして

おり、「図と地」という概念を引き合いに出していえば、図ではなく、地になる建物に共感を感じていたのである。

その後の実施設計の際に、岩本は正倉院を何度も見学し、その古木のテクスチャーに着かれ、それに倣って国立劇場の外壁を黒褐色に変更することにした。そして、その古木のテクスチャーを国立劇場で再現するために、校倉の校木にあたるPCコンクリートにサンドブラストをかけるとともに、壁・柱・軒下まで、すべてを黒褐色の吹き付け塗料で覆った(写真7)。校倉という単一のモチーフを四周にめぐらし、その全面をモノトーンにするというのも、先の引用にある岩本の「単色論」に呼応している。そして、建物の高さを高さ制限の20mより低い14mに抑えているし、皇居の堀端の道路あたりからは奥のフライタワーは見えないので、建物が低く抑えられているように見える。そして、横方向に配された、上下30段のPC校木がその水平感を強調する。モチーフは単一だが、PC校木先端に台形状にテーパがかかっていることで、壁面が細かい凹凸の連続で構成されることになり、決して単調にはなっていないし、その頂部では、一度線を切って、その後ろの柱形を見せ、その上に、大きく張り出した庇を回し、その下に多くの化粧垂木を並べているので、その外観には気品が感じられる。単一のモチーフとモノトーンで全面を覆いながら、決して単調に見えないのは、そのディテールやプロポーションが精妙に整えられているからである(写真8、図10)。ちなみに、この建物の縦横は、すべて柱埋込みになっている。

景観への配慮の仕方はさまざまだが、国立劇場では、岩本なりのやり方でその配慮を示しているのである。ちなみに、建物四周に階段はなく、グラウンド・ラインとほぼ同じレベルで玄関ロビーに導かれるようになっているあたりにも、規模が大きいかかわらず、できるだけ慣れ親しんだあり方をめざしていたことがうかがえる(写真9)。大・小劇場へのメイン・エントランスが、PC校木で構成される壁の下にさりげなく設けられているのも、同様の意図によるものだろう。

なお、壁面やPC校木表面の塗料は「ケミカル・ステイニング」(写真7,8,10)と呼ばれるもので、国立劇場の施工のために竹中工務店技術研究所が開発し、特許を取得したもので、安価でありながら、耐久性のあるものである。

5. まとめ

岩本博行を中心とする竹中工務店大阪本店設計部の設計で、1966(昭和41)年10月に竣工した国立劇場は、大・小劇場や、伝統芸能の資料収集・保存・展示、伝統技能後継者の養成という複合機能をほぼ正方形のシンプルな平面に巧みに納めつつ、その四周に校倉造り風のPC校木や、その頂部に大きく張り出す庇をめぐらせたものである。

校倉造りという、過去の建築様式に倣ったことで一部の建築評論家の批判を受けたが、設計代表者の岩本博行は、その評論家たちが信奉していたモダニズム自体が完全ではないことを認識し、設計に際しては、個人のアイデアよりも過去の蓄積に信頼を寄せ、その過去の建築の「型」を参照しつつ、そこに現代的意味を見出し、そのエッセンスを適用しながら、現代的なセンスと技術をもとに設計すべきだと考えていた。それは、一定のデザインのレベ

ルを保证する点で有効な設計手法であり、建物が持つべき性能や建ち方のよさをしっかり担保することを重視している点で、優秀なゼネコンの設計部らしい設計姿勢といえる。その一方で、校舎造りという単一のモチーフと黒褐色というモノトーンで全体を構成するという、岩本らしい手法も見られ、それを単調に見せないために、細部に至るまで、考え抜かれたデザインで整えている。

また、岩本は景観に配慮する建築家で、国立劇場では、モノトーンで統一していることや、高さを抑えているあたりにそれが見てとれる。人目を惹くものではなく、景観に参加する建物というのが、彼が目ざした建物のあり方だった。

以上から、国立劇場本館は、派手さはないものの、伝統芸能のための劇場として、建設当時においては最高水準の設備や機能を単純なほぼ正方形平面に巧みに納め、建築としての性能と、ディテールにまで気配りすることによってあるレベル以上のデザインを担保することを意識して設計されたもので、景観にも配慮した建物として評価できる。

6. 国立劇場の建て替えに向けて

以上に示したような建築史的価値に鑑み、国立劇場の建て替えに際しては、現在の建物の建設経緯に関わる文献、コンペ関係の文書や当選案の図面、実施設計図面で現存するものを保存するとともに、それらのデジタル化を図ることや、360度カメラや高精細のカメラでの建物内外の撮影、さらには写真や映像での解体時の様子の記録、そして上演記録などを保存し、後世に伝えることが望まれる。

写真



写真1 国立劇場東正面外観



写真2 国立劇場南側面外観



写真3 国立劇場西背面外観



写真 4 国立劇場玄関ロビー



写真 5 国立劇場大劇場内部



写真 6 国立劇場小劇場内部



写真 7 国立劇場外壁ディテール



写真 8 国立劇場庇下部ディテール



写真 9 国立劇場東正面玄関



写真 10 国立劇場外壁塗装

図版

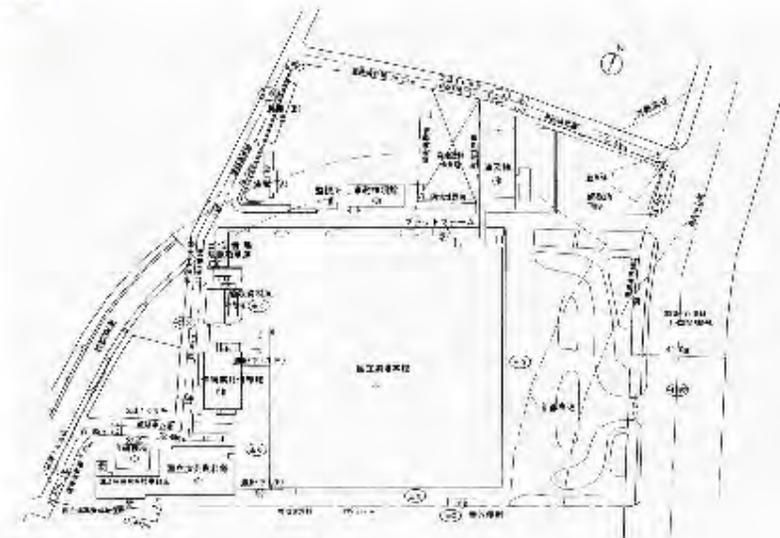


図 1 国立劇場配置図

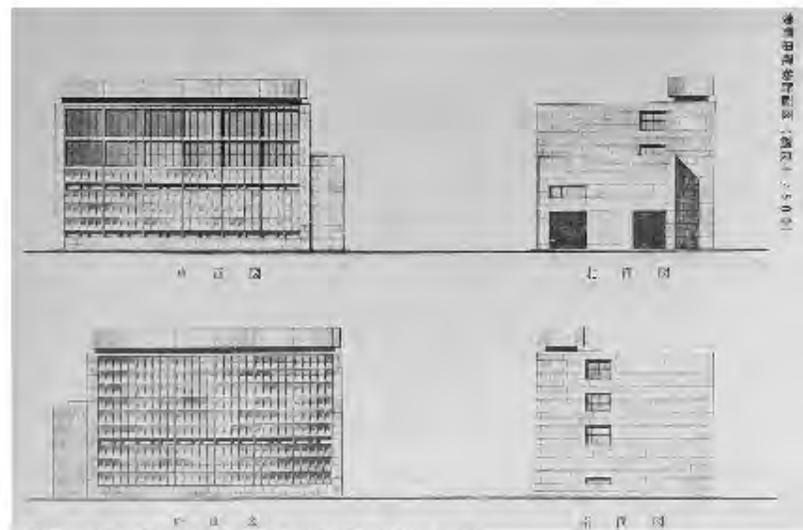
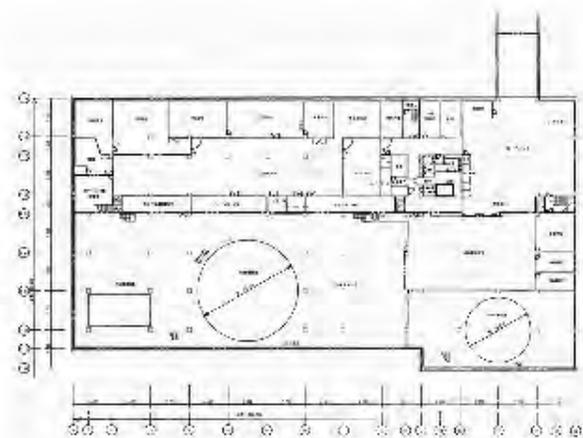
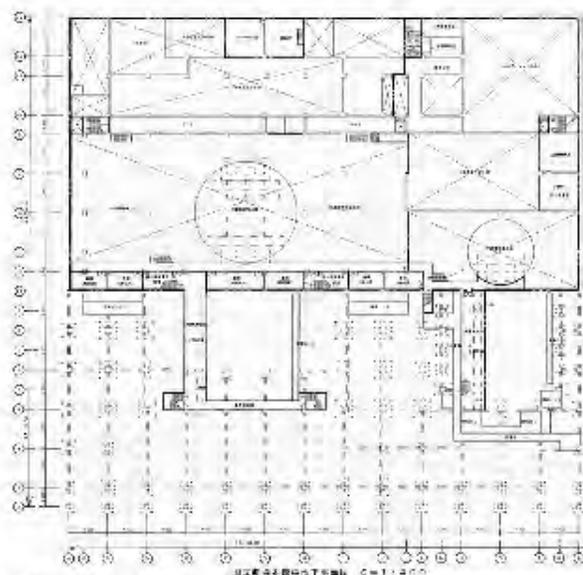


図 2 国立劇場敷地内首都高速道路換気用建物立面図



國立劇場中地階平面圖 8-1-400

圖3 國立劇場地階平面圖



國立劇場中地階平面圖 C-1-200

圖4 國立劇場中地階平面圖

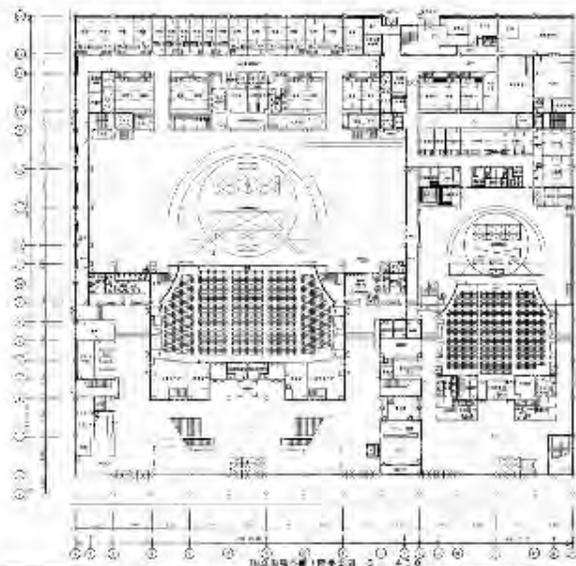


圖5 國立劇場1階平面圖

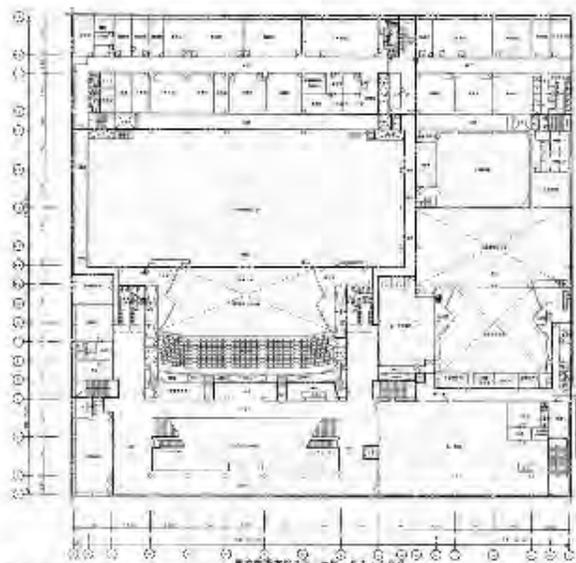


圖6 國立劇場2階平面圖

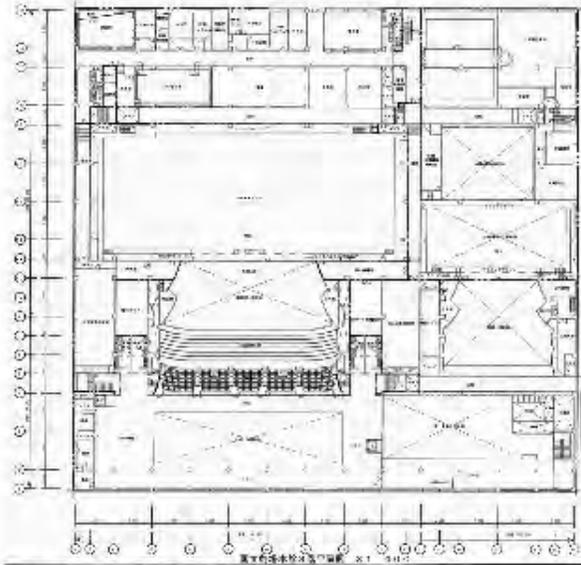


図7 国立劇場3階平面図

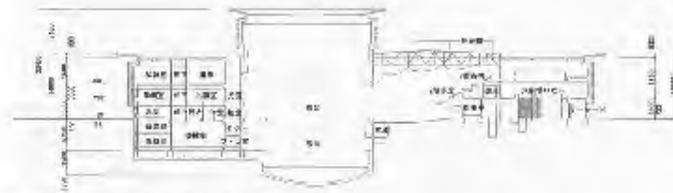


図9 国立劇場大劇場部断面図

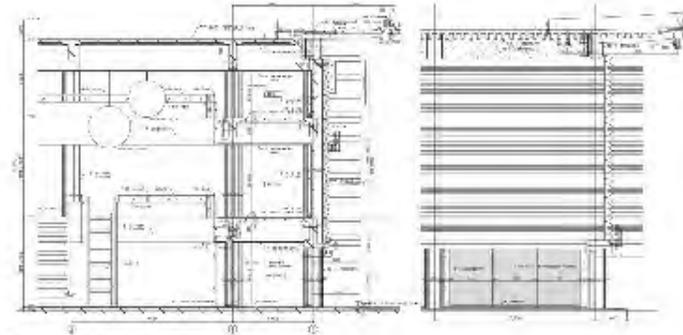


図10 国立劇場矩計図

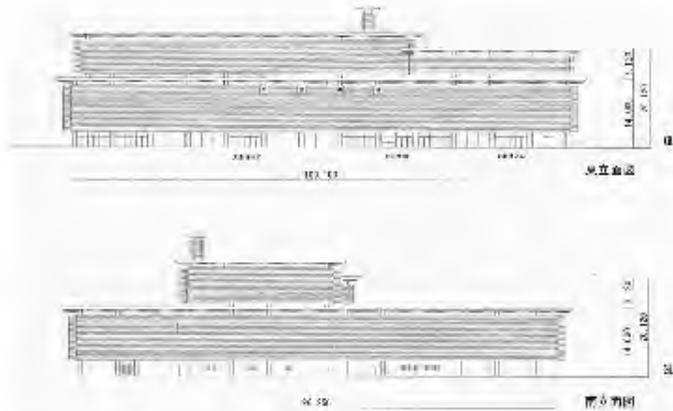


図8 国立劇場東正面図・南側面図



図11 国立劇場コンペ1等案外觀透視図

写真・図版リスト

写真リスト

- 写真1 国立劇場東正面外観
- 写真2 国立劇場南側面外観
- 写真3 国立劇場西背面外観
- 写真4 国立劇場玄関ロビー
- 写真5 国立劇場大劇場内部
- 写真6 国立劇場小劇場内部
- 写真7 国立劇場外壁ディテール
- 写真8 国立劇場庇端部ディテール
- 写真9 国立劇場東正面玄関
- 写真10 国立劇場外壁塗装

(上記の写真はすべて藤岡洋保撮影)

図版リスト

- 図1 国立劇場配置図(独立行政法人日本芸術文化振興会提供)
- 図2 首都高速道路換気用建物立面図(国立劇場設計競技募集要項添付図、国土交通省大臣官房官庁営繕部提供)
- 図3 国立劇場地階平面図(独立行政法人日本芸術文化振興会提供)
- 図4 国立劇場中地階平面図(同上)
- 図5 国立劇場1階平面図(同上)
- 図6 国立劇場2階平面図(同上)
- 図7 国立劇場3階平面図(同上)
- 図8 国立劇場東正面図、南側面図(同上)
- 図9 国立劇場大劇場部断面図(同上)
- 図10 国立劇場矩計図(同上)
- 図11 国立劇場コンペ1等当選案外観透視図(国土交通省大臣官房官庁営繕部提供)